翻刻『女熊阪朧夜草紙』

尾道市立大学　芸術文化学部　日本文学科　近世文学原典講読ゼミ
指導教員　藤沢　毅

翻刻『女熊阪朧夜草紙』

尾道市立大学　芸術文化学部　日本文学科　近世文学原典講読ゼミ
（二〇一六年度後期～二〇一九年度前期）

（巻一担当）石川いさ、加藤景子、佐野佳那実、新村万由佳、三好花純、
赤川穂乃佳、稲垣沙弥香、石原遼一、太古早紀、谷坂利香、永井千晴、菱岡妙子、
廣谷京子、福原葵、細川万衣花、山田茉里奈、渡邊美里

（巻二担当）石川いさ、加藤景子、佐野佳那実、新村万由佳、三好花純、
稲垣沙弥香、石原遼一、内田早希、太古早紀、谷坂利香、中島舞花、永井千晴、菱岡妙子、
廣谷京子、福原葵、細川万衣花、山田茉里奈、吉田彩夏、渡邊美里

（巻三担当）石川いさ、加藤景子、佐野佳那実、新村万由佳、三好花純、
内田早希、太古早紀、谷坂利香、中島舞花、永井千晴、菱岡妙子、山田茉里奈、渡邊美里

（巻四担当）石川いさ、加藤景子、佐野佳那実、新村万由佳、三好花純、
太古早紀、谷坂利香、中島舞花、永井千晴、菱岡妙子、山田茉里奈、渡邊美里

（巻五担当）石川いさ、加藤景子、佐野佳那実、新村万由佳、三好花純、
太古早紀、谷坂利香、中島舞花、菱岡妙子、山田茉里奈、渡邊美里

（編集　同　教員　藤沢　毅）

尾道市立大学（二〇一二年、「尾道大学」を改称）芸術文化学部日本文学科には、自主ゼミとして「近世文学原典講読ゼミ」というものがある。これは、正規のカリキュラムの中にあるものではなく、教員の呼びかけに応じ、興味を持った学生が自主的に集まり、活動するものである。当然、出席したからといって単位が取得できるわけでもない。しかし、だからこそ、こうした活動は尊い。

近世文学原典講読ゼミは、江戸時代に出版された読本というジャンルの中からテキストを選び、くずし字で印刷された文章を現代のものに直していく、いわゆる翻刻作業を活動内容としている。くずし字を読む力をつけることは正規の授業の中にもあるが、それに留まることなく、もっと読めるようになりたい、という意欲を持った学生が学んでいるのである。ゼミで翻刻したテキストは、教員の編集のもと、公開している。また、ゼミで培った力をつけた学生が、卒業論文制作にあたり、自ら一つの読本テキストを翻刻し、研究することもある。それもまた順次公開している。これまでに翻刻を公開したものを以下に挙げる。

近世文学原典講読ゼミで翻刻したもの

『浪華侠夫伝』（二〇〇七年三月）
『犬猫怪話』竹篦太郎』（二〇〇九年三月）
『蛍狩』宇治奇聞』（二〇一二年三月）
『小説東都紫』（二〇一二年三月）
『皎月菊花』大和物語』（二〇一四年三月）
『北野霊験』二葉之梅』（二〇一六年三月）
『斯波遠説七長臣』（二〇一八年三月）
『月花惟孝』（二〇一八年三月）

末田歩さん（四期生）が翻刻したもの

『復讐奇談』幸物語』（二〇〇九年三月）

大西華織さん（六期生）が翻刻したもの

『夕霧書替文章』（二〇一一年三月）

原田佳美さん（七期生）が翻刻したもの

『復讐奇談』信夫摺在原草紙』（二〇一四年三月）

村上幸代さん（七期生）が翻刻したもの
『小夜衣真砂物語』（二〇一七年三月）
橋原彩さん（八期生）が翻刻したもの
『［念仏塚高砂松］則定仁勇伝』（二〇一九年三月）

本冊子では、近世文学原典講読ゼミで翻刻した暁鐘成作の読本『女熊阪朧夜草紙』を公開する。

■底本略書誌

『女熊阪朧夜草紙』
暁鐘成作・画。
底本　藤沢毅所蔵本。
半紙本、五巻五冊。
文政七年（一八二四）刊、同八年修、嘉永以降印。
＊初印本と比べ、濃墨、薄墨、薄青、薄紅の使用がなく、また、刊記には入木により書肆名の変更がある。さらに「［嘉永新板］増補書翰大成」の広告が巻一見返しに貼り付けられていることから、嘉永以降印と判断できる。諸本の情報等、詳しくは、藤沢毅「『女熊阪朧夜草紙』論―岩井半四郎演じる小蝶―」（『読本研究新集』第9集、二〇一七年六月）を参照されたい。

■梗概

（巻一）応永年間、肥後国八代の城主鞠地忠頼は、山中で卵生の女児を得て愛育する。この児の実父は菜葉村の蝶六であったことがわかり、小蝶と名付けられる。成長早く、力量智謀勝れ、忠心孝心深い者となる。その後大内軍に攻め入られた忠頼は、小蝶と東屋なる嫗に継嗣菊稚丸を託して自害する。八代の山中に忠頼の愛した桜の大樹があり、この鞠地家滅亡の時、涙の如く白露を滴らせたことから、時雨の桜と呼ばれるようになる。
（巻二）大内家はその後勢力を拡大、周防国山口の居城で新たに抱えられた陶の局が、当主大内義忠の暗殺を謀るが、義忠は、彼女が鞠地家に仕えた東屋であることを看破。陶の局は無念の中で自害し、菊稚

丸は囚われとなる。小蝶は、八代の山中で残党を集め、熊阪の小蝶と名乗り、貪欲非道の家を襲撃して軍用金を集める。大内義忠は、時雨の桜を新築御殿の床板の材にしようと、家臣の桂木照人を八代に遣わす。照人は、山中で小蝶と戦うが、谷底に投げ込まれ、主君から預かっていた春鶯の名笛も奪われる。照人は桜子なる娘によって介抱され、二人はやがて結ばれる。

（巻三）大内家では、義忠の叔父である多々良弘茂が本家乗っ取りを企て、家臣の蜻蛉煙三に忍術の巻物を与え、密命を下す。小蝶は煙三を殺し、巻物を奪い、身につけた忍術によって大内家より蒼鹿の革を盗み出し、また菊稚丸を救出する。さらに将軍家に忍び麝の香炉を盗むが、発覚し、蒼鹿の革を落として逃亡。将軍家より大内家に疑いがかかり、上使が向かう。弘茂は偽上使を仕立て、義忠を責めるが、本物の上使が弘茂を糾弾。弘茂は改悛自害する。

（巻四）桂木照人は小蝶を捜し出して春鶯の名笛を取り戻さんと八代を出、播磨の室津に入り込み、ここに留まる。花街に桜の大樹が一夜のうちに生い出で、傾城花の戸が照人に愛を示すが、これは桜子が恋しさに堪え得ず八代から慕い来たものであった。照人は仲居の阿梅が熊阪の小蝶であることに気付き、両者立ち合いとなるが、花の戸が自害。自分が時雨の桜の精であり、恩義のある阿梅（小蝶）と、最愛の照人の戦いを止める。小蝶は春鶯の名笛を、花の戸の手を介して照人に返し与える。

（巻五）小蝶は峰相山鶏足寺の五重の塔に潜む。大内家の重臣氷室内蔵之助は小蝶の在処を見いだし、義忠に進言して、小蝶らをおびき寄せる。義忠の旅宿に攻め込んだ小蝶らだったが味方は全滅。また菊稚丸も既に捕らえられ、麝の香炉も取り返されていたことを知る。義忠は小蝶の忠心を称賛し、小蝶も義忠の仁心に感服。義忠は、将軍家に香炉を戻し、鞠地家再興を願い許可される。大内・鞠地両家はこのあと姻戚関係を結び睦まじく栄えた。

■翻刻の方針

・翻刻は序文からとし、各冊の表紙にある情報と、巻一見返し部分に張り込まれた広告については省略した。口絵、挿画は図版でも示した

・平仮名は現行の対応する平仮名に統一し、また、漢字も基本的には現行の書体に統一した。

・振仮名は底本にあるものの中、現在我々が読むのに必要あるいは便利と思われるもののみを付した。

・踊り字は「々」を除き、全て開いた。

・私に句読点や濁点、「 」、『 』を補い、また私に段落を設定した。

・割書は［ ］に入れて、それを表した。

・私に文字を補った場合は〔 〕に入れて、それを示した。

・明らかな誤記、誤刻も基本的にはそのままにした。ただし、衍字など、明らかに誤って重複している箇所には、（ママ）と付してそれを示した。

■翻刻

（序）

朧夜草紙序（印「盲不瞿蛇」）

稗史小説書、首め必、美婦才子有て、中ほど偸淫流落し、冊尾復讐顕栄して終る。是皆、小説家の常規也。而、痴児頑童、これを閲るや、美婦才子の淫奔して卒に顕栄発達するを羨み、淫奔を禁ずる所以をしらず、反て行をこれに倣はんとす。豈、勧懲の書ならんや。深く世道人情を害す。夫、小説家の務は孝悌義節を写して、人情を孝悌義節に移し、暴戻逆悪を描して、暴逆の終に死を全せざるを明す。只、稍々に人情を正道に導に在而已。而反て孝悌義節に淫奔を混ず。頑童痴児、若為ぞ能これを択ばんや。暁氏、ここに看る事あり。故に義侠の女を描して、淫奔と混ぜず。此書、雑劇戯場に倚と雖、固より痴頑の意をとる也。

政未夏日辟暑小舟中撰幷書

独酔游戯

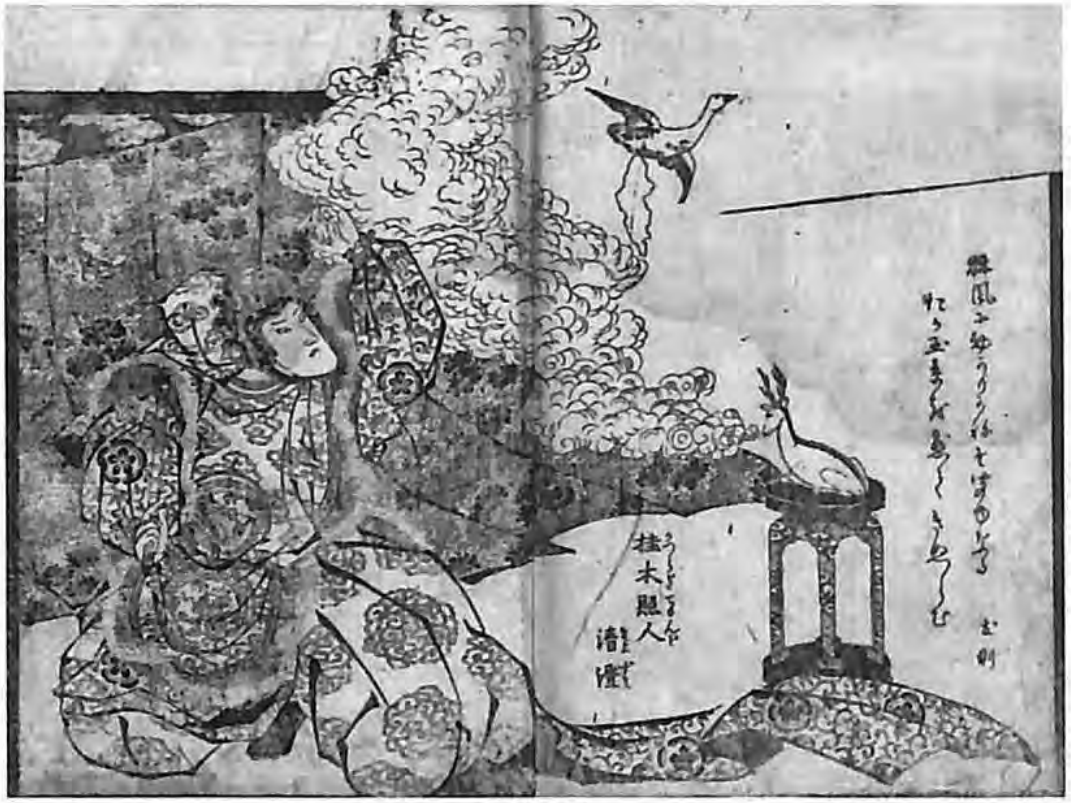
（印「一竿鳥日」）（印「楽心斿俠場」）

（口絵1）
熊阪小蝶
春帰テ茂苑鳥啼キレ月ニ
花落テ横塘蝶怨ムレ風ヲ

（口絵2）
桂木照人清澄
秋風に初かりがねぞ聞ゆなる
たが玉章を懸てきぬらむ
友則

（口絵3）
樵夫困の風六
桜子
逐レ夜光多シ呉苑ノ月
毎レ朝声少シ溢井ノ風

（口絵1）



（口絵２）

（口絵３）

（総目録）

「女熊阪朧夜草紙総目摽」

第一套　丹楓林狩倉　幽谷間闌子

第二套　風翻義兵旗　離苦桜液雨

第三套　逼恋短慮刃　老女猿楽能

第四套　述懐雲井雁　眩敵花吹雪

第五套　船閃藻切鎌　宙漂廃藤簍

第六套　顕奇瑞鹿革　打破轎手銃

第七套　世唱老夫婦　衆輯柳巷桜

第八套　戦忠義双刃　代親子桜操

第九套　一時鳴嶺廊　相図輯属兵

第十套　屍並旅館戦　情治兵家栄

「通計十套目摽完」

（本文）

女熊阪朧夜草紙　巻之壱

摂都　暁鐘成　戯作併画

第一套　霜葉林狩倉　幽谷間闌子

夫覆而　明　者天之徳也。聖主体　之善守　社稷。仰　而有信者　地之道也。良臣　則　之善治　国。故君臣合　徳　而　無国家傾危患也。

茲に応永の年間、九州肥藩八代の城主に鞠地左馬之頭忠頼とて、武勇豪傑の良将をはしける。代々家国繁栄し、武威さかんなること、恰も朝陽の昇るに斉しく、采地はいふも更なり、隣国の諸侯、火の乾けるに燥、水の湿へるに流るるごとく靡き順ひ、四海に武名を轟かせり。

頃しも十月中旬のことかとよ、四方の山路の樹々の葉を染、錦繍を烈ねしごとくなるよし聴へしかば、（挿絵1－①）「宜時節にこそ」と、忠頼、ある日、早旦

より『丹楓の遊覧を兼て狩倉を催さめ』と、自ら猟箭を負、弓を挾み、綺羅やかなる狩衣に熊皮の行縢しつ、許多の家隷に鷹を駕させ、犬を率せ、鳥銃、弩、蹄鼠のたぐひ、其余、数の猟の具を齎し、采地なる田浦嶺の雄雌なる山また山にわけいり、終日狩倉を催さる。殊に其日は名にしをふ、小春の天の長閑なるに、黄絞纈（黄纈纈）に紅葉して、羞明までに輝まさる梢の風色、ほとんど興をそへつつ、既に帰路に趣かんと、若干の獲物を列卒に捷なはせ、山足を望て下山のをりから、怪しきかな、那方の渓間とおぼしき（挿絵1－②）地方に的つて、嬰児の泣声しばしば幽谷響にひびき聴へしかば、忠頼、はやくも耳を欹て、弓杖撞てしばし彷徨、

「あな、不審や。こころ得ず。かかる山林幽谷に人栖べきとも思ほへず。狐狸の類ひ、吾を欺むくものなるか。且は田舎の賤の稚児を、鷲なんどの悪鳥、攫来て啄まんとなすにもや。何にまれ、誰あらん、其虚実をただせよ」

（挿絵1－①）

（挿絵1－②）

と命ぜらるに、後辺に倶したる良従の中より三個の壮士、ただちに進み出、「畏まつて候ふ」と、遼の谷間を吃と看くだしつ、彼嬰子の泣立る声を栞（栞）に、紅葉なす蔦の蘖にすがり、輝そふ樹々の株をとらへ、辛ふじて岩間にをり立、已往那辺と看めぐらすに、石屏峨々と嵯へ、石路羊腸をめぐらし、青苔露なめらかなり。尚も峙つ巖をつたひ、徐く泣声のもとに出たり。と看れば、岩の間に産ていまだ日を経ざると思しき、珠もあざむく計りなる端正なる女児、少さき草畚に入、是に数仞の縄を属たり。三個の壮士は左右の評義にも及ばず、『疾く主君に看たてまつらん』と、一個は草畚に結つけたる縄を携へ、先だちて攀登り、相図を定めて声をかけあひ、稍あつて難なく畚を引あげぬ。谷間の武士もこれに随ひ攀のぼり、三個もろとも忠頼が前に草畚を携へゆき、如此々々の由をありつるまま微細に言上るに、忠頼、ふごを引よせつ、嬰子の形勢を兎看角閲、しばし沈吟を惟さるるに、奇なるかな、這稚児は大なる卵のごとき皮破て生ぜしと看へて、めぐりに破し肉の皮あり。忠頼、のたまはく、

「吾、倩々鑑ふるに、長なる縄を畚に属しは、絶頂より千仞の谷に釣をろせしと見ゆ。稚児の相分、また狐狸雲陽などの所為とも看へず。こは世俗にいわゆる嚢児といへる者ならんか。最、不審きことよ」

とて、眉を嚬て尚もあらため細吟あるに、此草畚の横面に「菜葉村蝶六」と摽墨もて写著たり。

「これぞ愉（慥）なる照拠にこそ。賤しき農夫の貧苦に窮り、一子を育くむこと能はず、此渓底に捨つるか。亦は貪欲非道の党、いつわつて余児をもらひ、托みに属来し金銀をうばひとり、稚児は此山中に棄つるも計がたし。何にまれ、此ままに打棄をかば、猪狼の餌とならん。且には、采地の善悪ともに糾明を遂ずんば、政道の廃りなり。いそぎ、茲より彼里にゆき、実否を明白に糾さん」

との命に、並居る許多の良隷、みなもろともに、「実に実に、所理なる命ぞ」と、君侯の正しき辞を感じ、いそがせ給ふ。前後を守護し、稚児を草畚のまま指担

ひなどしつ、麓をさして下りぬ。

そも、此菜葉村といへるは、即、山の裾野の里にて、農家扶疎に立たるわづかの村里なり。忠頼、ここに至りて村長を呼よせ、蝶六を召れければ、村長は手織木綿のいと太やかなる茶染の布子に、紙衣のごとく操（揉）れたる古袴をつけ、先に進んで出来る。蝶六は後辺に順ひ、『いかなることの発しよ』と、怖る怖る遼さがつて蹲る。忠頼、蝶六を近くまねき、家隷にかの草畚を眼前に出させ、詞をやはらげ、

「你、この草畚をしれりや、否や」

と尋ねに蝶六、かしらを抬上、これを看るに、吾所持なす畚なれば、屢々不審ながら言すやう、

「何等の故かは知はべらねど、是はまさしく僕が持あつかふ畚にてこそ侍り」

と応ふ。忠頼、かさねて、

「爾あれば、此山中の谷間に稚児を棄つるは你が所為に違ふまじ。そはいかなる故にぞや。天を飛翅、地をはしる獣まで、子を憐れまざるものもなきに、斯、嬰子を棄つるには情由こそあらめ。但しは余児なるかは。微細に言語よ。つつみ隠して虚言をなど演なば、かへつて其罪かろかるまじ」

と、理非を分ちて索ねらるるに、蝶六、やや首を傾け、

「あな、不暁得おふせを承はるものかな。奴に置て嬰子を山路に棄しこと、更にをぼへ侍らず。去ながら、些ばかり思ひ的りし条こそあれ。妻なるもの、春の頃より妊娠て、既に月盈、時いたり、此七日まへなる未明に産の気つきて、何の苦もなく安々と産をとせり。『偐児にや、仗児にもや』と携上みれば、こは恁に、児にあらずして真紅なる一塊の肉の団なり。余りのことに詞も発ず。夫婦がをどろき、比ぶるに品なく、言あぐるもくだくだしけれど、『完く二個が前世の罪業ならめ』とあきらめながら、心も清ず、歎のあまりに逆血せしか、妻は其夜に物故はべり。詮方あらねば、野辺に送り、夜半の煙となし果つ、件（件）の肉の団は、他の聴ば尾に鰭を属、世に浮説

を言触さば、扉のたてられぬ他言、こころ憂も思ひはべれば、有あはせるまま這畚にいれ、去る七日の夕月の影を便に嶺にいたり、杣夫も通はぬ谷底へ千仞の縄もて釣をろし、跡をも看ずして帰りしが、其肉の塊変じ、稚児となりつるか。斯る児にて有もせば、いかで谷に棄はべらん」

と、首尾を落もなく微細に言にぞ、忠頼よりはじめ許多の良従、「世にめづらしき件よ」とて、互ひに是を評じ合ぬ。忠頼、ややあつて蝶六にむかひ、

「さてこそ你が説話にて一条の疑念、即地に晴たり。見よ見よ。これぞ其肉の団、破れて顕はれしに露違はず。即、卵生の児といつべし。吾、また思ひあはすることあり。往昔、勝宝三年霜月中旬、此八代郡の土民、一塊の肉の団を産めり。其父、他人の看んことを愧、筥に入て山中に棄たりしが、片心にやかかりけん、七日を経て後、往て看るに、卵のごときもの破て、中に女子あり。父母ともに只管よろこび、寵しみて養育なすに、八月にして、体、にはかに壮長し、其長、三尺五寸にをよぶ。亦、顔貌も端正なり。然るに女陰なく、些に尿の道のみとなん。自然に智ありて、七歳の時、法華花厳の二経を誦す。後、出家して舎利尼と号す。勤行精進、誦経かくることなく、問に応答へずといふことなし。俗、をもんじて、舎利菩薩と称ずとかや、書にも著はし、古老の言も伝へしことなり。前程にこの稚児を更むるに、今かたれる一条に斉しく、はたして女陰なく、尿の道、わづかに見ゆ。実、よくも符合せしことならずや」

と語り給へば、蝶六も並居る良従一統にしばしば奇異の想をなし、「かかる異変も往古に有つることか」と口々に語あひつつ喧すし。忠頼、かさねて宣ふ容、

「倩々、這嬰子を鑑るに、凡ならざる相ありて、末たのもしき奇児なれば、今より吾に得させよ。養育なして家隷となさん。亦、你も妻死して鰥男ずみの由なれば、館に来よ。稟給すべし」

と命に、蝶六、つつしんで数回よろこび、

「あら有難き命かな。去ながら、斯る田舎の草ぶかき

地に成長、鰞鼠にも比べし、土ほぜりの賤しき身なれば、鍤鏝の余、たづさへしことも侍らず。稟給せらるとも、只、夏日の榾火、冬の朝の扇にもまされり。無益の稟給を喰んも心ぐるしく侍れば、小児のことは、草木までも渾わが君の国の中に生ぜしものなれば、命にまかせ奉らん。奴が義は幾重にも赦し給へ」

と、農民のただ律義誠心、をもてに露れて固く辞するに、忠頼も、

「げに所理なる演舌よ。去ながら智者も千慮すれば一失あり。愚者も千慮すれば一得あり。匹夫にして百世の師と成、一言にして天下の法となるといへば、豈、いやしく成長ばとて、仕官を怖るることあらんや。さはいへ、田舎の草屋に心を易くくらせるものを強に召かかへなば、嘸な心を労しなん。そは你が意にまかせよや」

と、家隷に命じ、五枚の黄金いださせ、蝶六に給はりぬ。固辞も君侯の厚志をかへつて背くに似たりとて、再三再四いただきつ、恩を謝し、稍て村長もろともにここを退ぬ。

既に短き冬の日、西山にかたぶき、麓の紅葉にかがやきて、今一しほに色まさるに、熏昏ちかくなりぬとて、良従、帰路をいそがせば、忠頼は心ききたる列卒の者に稚児をいだかせ、館をさして急ぎたまひぬ。

去ば鴻鵠の雛は凌空の心ざしあり。虎豹の駒に食牛の気ありと、禽獣すらもつて其をひ立より異なり。まして況や、万物の霊たる人倫にして凡者ならざる稚児。忠頼、館に携かへり、即地に乳ある婦を召れ、大切に養育させ、蝶六が児なればとて、名を小蝶とよび、寅酉にいつくしみ浅からず。

時に奇なるかな、この稚児、一月を経て歩行、二月を過て食し、三月を越て言語さはやかなること、成長たる童にことならず。「偖も希有の稚児よ」と、家隷、上下の老若、舌をまき、眉に皺よせ、「末いかならん。孽を発来らさんもはかられじ」など、密に謗りあへりぬ。

光陰、箭を射よりも疾く、一瞬の間に幾春秋を過こして、応永十一年の青陽をむかへ、既に小蝶、十一歳にぞなれりけるが、成長にしたがひ、頗る力量、衆に秀で、男子たりとも是にをよばず。其上、智謀たくましく、学ばずして文武両道に達し、忠義正しく守ること、金鉄のごとし。終日主君の身辺にあつて、仕へ怠ることなく、時ふし、菜葉村にいたりて父蝶六の安危をとひ、孝を竭すこと、また儔ひなし。故にはじめに誹りし家隷等も、主君の鑑定の違はざるを感じ、「あはれ、鞠地の礎ともなるべき者よ」と、末たのもしく思ひつ、自から重んじて称じける。

偖また、左馬之頭忠頼が夫人を籬の前ともふせしが、過つる年の暮つかたより、妊身となりて、菊を寿く重陽の佳節の日に的り、月盈、出産の紐、安々と解ぬ。

ここに東屋といへる、年たけたる嫗、昼夜ともに産婦の身辺をさらで傅きまいらせたり。此嫗はこれ、小蝶いとけなき時、乳を含めし嫗なるが、ただ一月にして乳ぶさを離ち、其用なきといへども、心ききたる嫗なれば、其后も館にかかへ置れしが、今般はよき産家の守護とてつけをかれしかば、東屋、いそぎ携上みれば、雨を含る芙蓉の華、月をうつせる珊瑚の珠のごとくなる若公にぞ坐しける。忠頼にも夫人にも優曇華の葩まち得たる心地しつ、よろこびの眉をひらき、鞠地の家に寿きの菊を重ねし誕生とて、菊稚丸と号たまひぬ。貴賤、賀儀をつとめ、税（祝）はぬ人もあらばこそ、日毎に喜悦の声、嘐きあへり。

春風、桃李の花開くる日あれば、秋露、梧桐も葉のをつる時あり。さる程に夫人籬の前には、産後の脳（悩）みに臥たまひしが、幾程もあらせず常なき夕の嵐にさそはれ、朝の霜と消失て、亡人の員にいり給ふに、年来階老（偕老）の契浅からざりし忠頼の悲歎、たとへんに品もなし。今はただ菊稚のみこそ心の楽みよとて、愁ひの中にもいつくしみかぎりなく、「厳風にも的じ。露をも化にはせじ」と、恰も掌の珠玉、挿の葩に異ならず。東屋、小蝶の両女を菊稚の守護

とさだめ、其余、乳母、侍児等あまた傅かせられけるが、兎烏に関守なく、春往秋去て、はやくも応永廿年にうつり、既に小蝶は廿才にをよび、艶容、日々に増り、花を欺き月を嗤ふの貌あり。菊稚丸も十才にならせ玉ふに、是も世にめづらしき美男にて、在中将の稚だちも斯やあらんと、婦も愧べき形勢なりき。

第二套　風翻義兵旗　離苦桜液雨

されば兵家の大変、一慮より起り、世の転変、また一掌を返すがごとし。

此時、天下の武将は足利四代の後胤、源義持朝臣にてぞ坐しけるが、去ぬる明徳三年冬のはじめ、南北の両朝、御和睦ととのひ、三種の神器、入洛ましまし、南帝、嵯峨に還幸の後は、南方の官軍、なみだに咽び、今は忠烈を誰が為にか励さんと、竜の雲を離れ、虎の山を失へるがごとく、戟をれ、矢種つきぬ。されども楠正勝一個は、「父祖の怨を報ぜずして、従（徒）に天をいただき、地を踏こと、幾許か口惜かるべき」と、死を一挙にきはめ、千剣の城に楯こもり、「今一戦をとげ、運を天にまかせ、鬱憤の意霧を晴さずんば、一族一総に腹きつて、武義を後世の記録にとどめん」と、其勢、わづかに二千余奇（余騎）にて、義兵の幡を翻がへす。

ここに、菊池左馬之頭忠頼は、楠正勝と心を一にして、今年義兵の旗を挙られしかば、九国の官軍、悉々反覆し、所々に城を築き、寨を構、すでに戦国とはなりたり。正勝は千剣破にありて千変万化に籌策を惟し、敵軍をしばしばなやませども、京師の討手多勢にして、恰も潮の涌にひとしく、鷹雉猫鼠の違ひあれば、終に撃負、城をちぬ。

又、九国の撃騎には、大内修理之助義簾に鎮西征伐の斧鉞を給はる。義簾、もとより血気衆にこへたれば、些しも固辞ず、五万余騎の勢を引卒て赤馬が関より兵舟七百余艘にとり乗て、門司が関より漕渡し、既に此地彼地の城を亡し、寨を零せり。

さる程に此よし、鞠地に告る早馬、礒うつ濤にひと

しく、注進、礙を撃に似たり。これによつて城中の良臣勇士等、籌策をさだめ、追手、搦手、左右をかため、今やおそしと待かくる。此とき、大内義簾は、勝に誇つて肥後に討入、ところどころに火を放ち、一宇も残さず焼亡ぼし、川も裂き、木石をも砕く勢鋭にて、頃は晩春の上旬、まだ明やらで横雲も靉ざる中に、融風に幡散満（散漫）と翻し、金鼓をならし鬨をあげ、一上に哄と寄たりける。予て期したる慈の軍兵、高櫓より石弓を刎、焙禄（焙烙）火箭を抛かけ、さし詰、ひきつめ、箭種も竭よと射（挿絵1－③）かくる分野、春雨の花を落し、凩の風、梢の葉を散すにひとしく、前にすすみし軍官許多、ばらりばらりと射零され、一挫と存外、対軍は案に齟齬して、しばらく馬をば磬たり。これを軍のはじめとして、両軍たがひに乱あひ、鋒より火ばなをちらし、鎬を剪、鍔を割、矢叫の音、鬨声、天に応じ地を震ひぬ。されども城主左馬之頭は、世にきこへたる良将なれば、よく千術を竭し、万法をあらはし、着令なせば、軍卒ここ

（挿絵1－③）

ろ一致して忠義の勇士等、身を風前の塵に比し、命を蟋蛄に軽んじ廁殺ゆへに、さしもに猛き対軍の逞兵、すこしは是に責厭倦て、合戦数日をこへ、輒く落べうも看ざりき。

去ながら、大内の軍勢は広太なれば、日々にくりかへ、荒手（新手）をもつて些しも疼まず、城中の軍卒は一心を鉄石に比して隄阻ども、小勢なれば夜々に労れ、さしも名を得し勇士等も陣没なすこと半に過て、既に危ふく看たり。

かかりし程に勇婦小蝶は、軍発せし其日より、『出陣なして声花しき軍をせん』とをもひしかども、忠頼、しばしば制してゆるさず。ただ、菊稚丸の守護を厳に命ぜられしかば、合戦こころにまかせねば、身は小具足に固めながら、牙を齩でひかへしが、一発城中たのみ些く聴へしかば、東屋に菊稚丸の守護をたのみ、兵具とつて抛かけつ、討て出んず勢ひに、東屋はじめより是をとどめ、衣甲の袖をひかへていふ容、

「やよ、待たまへ、小蝶ぬし。願ふことにはあらねども、従横に充たる敵の中へ、おんみ一個斫入て、もし陣没にやなどおよび、当城も滅亡せば、誰あつて稚公を扶まいらす者やはある。賤妾といへば、老の身の、よる年浪の浮漚の、あわれをんみは衆にこへ、世々に稀なる性なれば、杖はしらとも思ひはべり。主君の命は茲なるぞ」

と説さとせども、螺鉦の音も濁りて聴ゆるに、小蝶は弥猛にはやりつつ、此方も供億、かしこも心ならざれば、『いかがはせん』と、立たるをりしも、一室のうちより声高く、

「やをれ、小蝶。しばし、しばし。血気にはやるは匹夫の勇。すずろの合戦、無益なり」

と、紙門を颯とをしひらく。両女はをどろき、身を翻せば、誰あらん、これすなはち主君左馬之頭忠頼、衣甲を傍辺に脱棄つ、家に伝はる百夜と号けし名香をくゆらし、敷皮の上に坐します。威あつて猛き其形勢、なをも喫一驚、

「こは何時の間にここには入せ玉ひし」

と不審む面色に、忠頼、両女を近くまねき、
「吾、籌策を竭し、対軍を脳（悩）し、屡々隄阻とどむれど、天運、今日に滅したるにや、慈に属せし四面の諸城は先だつて滅亡し、既に当城も憑みきつたる忠義の勇士等、おほくは陣没をとげ、些にのこる良党も、寄くる突兵猛くして、対ふに術を失へば、你、いま項羽、樊噲が勇を震ふとも、いかでか籠城をもひもよらず。両女、これより菊稚をたすけ、搦手の閑道より山越にをちゆき、いづくの山林漁村にも身を潜め、菊稚を成長らせ、時節を伺ひ、再び家名を起しくれよ。是こそ後の遺品ぞ」
と、竜頭うつたる五枚鏊に百夜の名香をそへ小蝶にわたし、くれぐれ末を托みつつ、忽ち自殺と看へければ、両女は左右に携つき、涙ながらに推とどめ、
「吾々もふし上ずとも、知しめされしことなれど、弓箭とる身の風には、義を万代に止めん事かたく、身命を一時に棄なんことは最安しと承り侍れば、一まづ稚君もろともに茲を落のび、しばし安危を窺はば、素懐の幡を翻す時節も亦、はべらん。只、此ままに零させ給へ。零させ給へ」
と進むれど、
「こは、所理なる言ごとながら、凡、武士の身は死すべき場に死ざれば、世々に汚名を残すことあり」
と、更に承応けしきもなく、短刀ぬきもち、弥陀の仏名となへつつ、腹十文字に掻きつてぞ果給ふ。両女はひしととりつきて、前後も分ず泣居たり。菊稚丸も父子一世の哀別離苦、なんと詮すべ亡骸にいだきつきつつ、声をたて涙に咽びをはしける。
時しも敵兵、城中に乱れ入しと思しくて、金鼓の音も乱調にひびきしかば、両個ははぶり落る涙を払ひ、
「不覚の歎きに猶予せば、主君の命も浮漚とならば詮なきことよ」
とて、小蝶は遺品の名香と鏊を怕につつみつつ、腰にしつかと結ひ属、『忠頼の亡骸を敵に看せじ』と、殿中に火を放てば、頃日ひさしく雨降ず、天気乾きし時節に、風さへきびしく競ひ吹て、しばらくの間に四面

に燃つき、大廈金屋、一片の炎となつて、黒煙、虚空に渦巻、さながら阿鼻焦熱を眼前に看がごとく、世界ことごとく焼滅するやと、怖しかりし光景なり。

両女は若君を扶けつつ、是を落路の便著とし、搦手の小門を蒐抜、閑道より山を越、いづくともなく零行ぬ。

嗚呼、これ、怎なる日ぞや。珠を磨き花をかざりし殿堂ことごとく啻離々たる郊原となり、塁々たる白骨、丘山にひとしく、城外に陣没なすもの、一千七百余奇（余騎）、尸は野経（野径）の叢に横へ、鮮血みだれて春の野に秋をとどめ、紅葉散しくかと誤たる。

二説、此八代の山中（山中）に暁桜と名にをへる大木の名樹あり。幹のまはり数仞ありて、葩大く、香も余木に異なれば、忠頼、世にいませし時、只顧に寵愛、朝な夕なに塵をはらひ、根に水をかけ、屎を入させ、育に懈りなかりしかば、年々歳々葩の色香も一しほに、「吉野、初瀬もなかなかに及ばざる光景なり」と、世に其名高く聴へぬ。

小蝶、東屋は菊稚丸をともなひ、峰にのぼり、谷を下り、辛ふじて此樹下までのがれ来つ、霎時ここに憩んと、桜の株に腰うちかけ、那方をはるかに眺むれば、敵兵、「ゑいゑい乙」と凱歌をあぐる声、天にひびき、地をうごかし、滅亡の煙、永くたちぬ。両女はそぞろに涙を流し、菊稚丸の貌、熟々（熟々）と詹仰り、

「実や、人間、盛者必衰の果を免がれず。ただ満月の闕るがごとく、疇昔は栄花の窓に遊び、今日は山路に逃塌よひ、往去さだめぬ亍隔陟となり、渓を流るる水の音、松吹峰の嵐にも心をかるる身となるは、有為転変の世の中よ」

と、互に顔を看あはせつ、霎時なみだを催しけり。

浩時から追敵と看へてあまたの軍兵、ばらばらとあらはれ出、主従を犇と執囲み、「のがさじ。やらじ」と閲たり。小蝶は些しも億（臆）する色なく、東屋、菊稚を後辺にかこひ、

「女と謾り後悔すな」

といひさま、刀抜もちて、寄ばきらんと身がまへたり。「言ないわせそ。撃てとれ」と、斫てかかるをこととともせず、的るを僥倖、横衝直撞、きり立きり立、傍辺に尸の丘を築きつつ、徒首になつて荒たる形勢、恁なる天魔鬼神をも挫ぎ、孟賁が骨をも砕くべき競ひに、群がる軍兵、きもを消し、吾さきにと逃行あり（挿絵1－④）さま、峰の嵐に咲みちし花を散すに異ならず。小蝶は猶もいきほひ含み、「黒心、かへせ」と追蒐たり。

亦、こなたよりも許多の追敵、むらむらと出きたり、菊稚、東屋をとり巻たり。老女なれども流石の東屋、「老の手煉を見すべし」と、刀ぬきもち戦かへば、言がひなくも斫立られ、従横に逃去に、

「とつて返さば面動（面倒）なり。小蝶がことも心にかかれど、一まづここをのがれん」

と、草をわけ、落葉を踏、葛の蘖に取つきつ、鹿の径をたどりゆきぬ。

小蝶は、夥の敵兵を一個ものこらず斫ちらし、鮮血

（挿絵1－④）

にしたたる刀ひつさげ、『零るに心易し』とて、呼吸をつぎつつ立もどり、看れば菊稚、東屋も其影だにも見へざれば、心おどろき胸轟き、

『もしや、怨敵の擒ともなりやしつらん。是は是はいかに』

とあきれはて、啻、忙然たる後辺より、先に逃たる軍兵の一個、ここに立もどり、『手捕にせん』と無手与くむ。小蝶はにつこと打微笑、

「はじめの手煉にこりもせず、飛で火に入夏の虫」

といひざま、腰を捻りつつ、きりりと前に引まはし、頸つかんで礫の如く、遼むかふへ抛つくる。をりから此に爛熟たる暁桜の葩毎に、涙のごとく白露したたり、山めぐりする時雨にひとしく、樹下浸と濡しかば、小蝶は吃と詹仰め、

「吾、前程より事きうにして夫ぞとも今まで心つかざりしが、是ぞ主君の愛樹の桜。花、ものいはねど哀をしり、寵愛うけし君侯の別を悲しむ涙の時雨」

といふ後辺より、件の軍兵、なをこりずまに無二無三、斫てかかれば、身をかはし、二撃三うち討合しが、一たまりもなく一刀に首はころりと落てけり。絶いる死骸を看むきもやらず、

「流石、名を得し暁の桜は花にあらはれて、心やさきしき形勢や」

と、詹仰てぞ彷徨めり。

女熊阪朧夜草紙　巻之壱　畢

女熊阪朧夜草紙　巻之二

摂都　暁鐘成　戯作併画

第三套　逼恋短慮刃　老女猿楽能

偖も大内修理之助義簾は、鞠地忠頼を一戦に亡し、九州の乱を鎮めし賞功によつて筑前の国を賜り、山陽西海の探題に補せられ、周防の国山口に居城を構ふ。故に威徳八蛮にかがやき、竜の翼を得たるがごと

し。

されども水に清濁あり。月、亦、円闕ある風にて、幾許も経ず、義簾、病労に臥、しだいに重りて、終に良医治術を竭し、加持祈禱の験もなく、冬の中旬、朝の霜と消うせ給ふ。是によつて、今年十九才になり給ふ義丸君、家国を相続し、大内之助義忠と号す。

既に霜往、露来り、時移り、事さつて、はや茲に七歳の春秋を経にけるが、諸国の狼煙立さつて、兵革動くことなく、天下泰平を賀し、万民安楽と唱へ、ますます穏にして、武家、弓を袋に入、太刀は匣にをさむる代となりしかば、武を専とせし義忠も、をのづから軍務に怠り、武道いつしか翻つて、王法に心をよせ、花の晨、月の昏には褒貶の歌合を催し、或時は蹴鞠、茶法、田楽、猿楽などを翫び、そのうへ許多の美女を召あつめ、女色にふけり、婬楽に戯れ、花車風柳の遊興をこたらず。館の殿造はことごとく大内に斉しく、かるがゆへに費、一日に万金を没し、万俵を竭し、其奢侈たとへん方もなし。されば、上、道をうしなひ、下、功を廃しかば、奸佞の党、まねかずして集り、媚へつらふこそ薄情き。

そも、此驕のはじまりを索るに、今より二歳あまり前、皇都の公卿方に年ひさしく仕官せし婦のよしにて、陶とよびなす中老の嫗、破瓜にいまだ満ざる小菊とよべる女児をもてるを召かかへられ、陶の局と称て身辺ちかく召れ、女児も侍児の烈に加へられける。それよりして後、ある時、殿上の式より地下の形勢を問せらるるに、陶の局、謹で宮中の光景、朝廷百司の政、年中行司の節会、其余よろづの格例なんど、微細に説話に、義忠、只管陶を賞じ、是より日毎に皇居、月卿雲客の行状を聴をよび、屢々王法を信ぜられしかば、陶の局も其尾に随ひ、左説右説、ますます文学詩歌乱舞をすすめ、

「『人は唯、賢に馴よ。賤きに触ることなかれ。花中の鶯舌は花ならずして香し』と言せば、文学なき者は、人倫に遠く禽獣に近し」

など啓すに、義忠は「げにも所理なる辞なり」と、晨

昏これに泥み、陶の局に許多の賞禄をあたへ、武功の誉れの勇士といへども文学なければ蔑して更に用ひ玉はず。日を追て奢侈増長せしかば、執権たる氷室内蔵之助景行をはじめ累世の良臣、かしらを傾け、評義に心を労しつつ、稍て諫めて啓すやう、

「倩、愚臣、家の興亡を案ずるに、いにしへより武家にして王法を修し、詩歌管弦の徳をもつて国家の繁茂、いまだ聴ず。末世にも亦、違ふべからず。其故は、その家職にあらずして、其外を執すること、稚児の家を忘れて差路に迷へるに喩へたり。近来、諸国しばし穏なりといへども、此首の残党、彼首の余類、いまだ根断葉枯ることなく、時をうかがふ佞人多なり。今、賢意を更め給はずんば、国家の傾廃遠からず」

と、諫の涙、袖を浸しつ、詞を竭し理をせめて再三諫言怠らずといへども、良薬は口に苦く、金言耳に逆ふの例にて、かへつて身辺を遠離られなどして、忠臣は日毎にしりぞき、奸臣夜々に蔓るぞ是非なき。これ渾、陶の局よりおこれる事とぞ。爾のみならず、頃日より新に夥き御殿を立られ、詹前（檐前）には金銀を鏤め、良材麗器をつくし、既に日を経て過半成就なしたり。

しかるに義忠、ここに一箇の願望あり。こはいかんとなれば、今般あらたに営まれし御殿をば、京師室町なる花の御所にたくらべ、桜御殿と世に伝へんず思し立にして、『世に並なき名樹の桜木をもつて席上の牀板となさん』と、家隷はいふも更なり、番匠、日傭の者までも命わたらせ、屢、名樹をもとめ給へど、大牀の板ともなるべき大木は稀なり。遐々深山に大樹ありといへども、名もなき谷の埋れ木にして、ほとんど心にまかせざれば、是のみに事をかき、空しく数の時日を送られけるが、一日、許多の家隷をつどへ、「いかがはせん」と議せらるるに、末席にひかへし煎合権平といへる軽き役をつとむる若者、すすみ出てもうすやう、

「愚臣、かねて聴をよび侍るは、九州肥後の国、八代

の山中に時雨の桜と号つる大樹あるよし。是なん、葩も余木にこへ、色香もひとしほ立勝りて、世々に稀なる名樹とこそ伝へし者侍りし。此樹を捜しもとめなば、成就眼前なるべし」

と告にぞ、義忠、悦喜の眉をひらき、

「肥後の国となれば、さまで遠き地方にもあらず。疾その桜を伐出さめ」

と、最うれしげに宣ふに、陶の局のもうすやう、

「命、さることに侍れども、其名樹の桜といへるは、賤妾もとくより世の風声に聴をよべり。そも、此液雨の桜とよべるは、もとよりの号にあらず。はじめは暁桜とて、希代の名木にて侍りしを、先年滅びし八代の城主菊地左馬之頭忠頼、ひたすら愛し、寅酉そだてに怠ることなく、それ故、殊に色香もまさり、葩も歳々穠んなりしが、不図、八代落城し、忠頼最期をとげたりしが、其時にかの桜、花ものいわねど、朝夕に寵愛うけし忠頼の別れを惜み、爛熟たる葩より涙を流すがごとく露したたりて樹陰を浸すその光景、あたかも霙のふるに似たりとて、世の人、しか称なすと聴はべり。されば名樹といひながら、こは不吉の木ならずや。其上、大樹の精あるものを伐たまはん事、好ましからず。且には九国乱軍の後といひ、今、晩春の上旬にして葩の穠の最中なれば、何をいづれと深山の奥、わかち難くやさぶらはん。余木も多なることなれば、那桜にもかぎるまじ。猶、思慮あらまほし」

と、只管とどめまいらするに、義忠、呵々と打咲ひ、

「你が言ところ、所理なり。さりながら何条かばかりのことに意をかけんや。敵の愛樹を伐とつて、意のままに計ふは、便、威徳の強きにあらずや。乱軍の後といひ、葩の穠の最中なれども、山中にわけ入て峰の渓間の分ちなく索なば、捜し得ざらんことやはある。誰あらん、肥後に下りて有処をもとめ、即地に伐とり来れよ」

と焦燥たまふを、執権内蔵之助、はじめより詞もなくて扣へしが、「先、須臾」と推とどめ、

「焦燥たまふは所理なれども、治定と有処のしれざる

に、詐多（許多）の人夫をもつて山中に分入んは、隣国への聴へも宜かるまじ。統て名樹を捜し索るには、世に名だたる笛を携へ、其地にいたつて調るときんば、必ず奇異をあらはすよし。誰にもあれ、此条を命ぜられ、名樹の有処を吃と見きはめ、厥后、樵夫、山児等をもつて斧を入させんには、不知（不如）」

と、事になれたる景行が辞に、義忠、承応て、

「げに你が言ところ、最なり。僥倖に桂木照人は若輩なれども楽道に秀たれば、渠に此役を命ぜん」

と、照人を召れ、代々重宝たる春鶯と号し名笛を出し、

「是をもつて火速、名樹の有処をもとめよ。猶予なせそ」

と厳なる命に、照人、つつしんで名笛を恭々しく頂き、「即地に発足つかまつらん」と、稍てここを退出ける。

陶の局も今さらに止むるよしもあらざれば、最本意なげなる形勢なりき。

そも、此照人といへるは、今年廿五才なるが、素、榛間国（播磨国）清泉の里の幽けき農夫の児なりしが、稚きより楽の道に心をよせ、桂木主水といへる楽官の浪士、此里に住けるを師とたのみて学びしが、好める道とて漸に芸道発達しにけり。主水に子なきをもて、両親に乞て養子となし、桂木照人清澄と号しける。厥后、父子とも古郷を去て、周防の国にをもむき、大内家の楽官となれり。しかるに、此五歳以前に養の父母とも死て、照人一個孤子となれるが、義忠の賢慮にかなひ、秩録（秩禄）をひをひ加増ありて、親主水の代よりも遼に立勝りぬとぞ。

且説、陶の局が女児小菊は今年十七の春をむかへ、容色日々に増りて、紅顔翠黛にして、殊に嬋娟たる風色に、いつしかより義忠、ふかく意をかけ、花見の御遊、良夜の会、をりに触つつさまざまと口説たまへど、印南野のいなみがちに難面いらへのみなりしが、世の常言にいへるがごとく、可愛さあまりて悪しみ強く、義忠、いまは怒りに絶かね、帯刀をつとり一撃に

斫すてんず形勢に、小菊はおどろき、殿中を此よ彼と逃まはり、「ゆるしたまへ」と賠話れども、耳にもいれず、眼を瞋らし、「脱さじ。やらじ」と追蒐たまふ。陶の局、（挿絵2－①）かくと聴より、貌つくろふ寸簡さへ長き廊下を逸散に四度解なきまま蒐きたり、怒の刃の下をくぐりて携つき、

「待せたまへよ。待せたまへよ」

と推とどめ、

「是はいかなるあやまちありて、かかる時宜にはをよびしや。罪科あらば、這母に聴せたまはば、禁しめて、言もし聴もせし上にて、脱がたなき事にしあらば、命をめされ候とも、何か残りの多からん。刃をいかりともろともに蔵めたまひて、一応、縁故を聴せてたべ」

と、詞を竭しとどむれば、義忠、帯刀を刀室にをさめ、

「吾懲り、余条ならず。過つる頃より風と那女を想ひそめ、数回くどけども、固く辞てしたがはず。早晩

（挿絵２－①）

つれなき応答のみ。人、われ〔に〕難面ければ、吾亦、人につらしとや。迚も靡ぬあだ桜。余所の葩となさんより、枝を伐さけ根を断て、葉を枯さんずと思ふによって、此為体におよびたり。かくいふうへは、你ぢきぢき女児を口説、わが意に順はせよ。もし亦、承応けしきなくば、首を撃て出すべし」

と、言尖に宣へば、陶の局はつつしんで、

「委細承引たてまつれり。善悪ともに時をうつさず返答もふし上べし」

とうけがふ詞に、義忠も面を些し柔げて、

「霎時の猶予はなすべきぞ。必らず色よき応答を聴せよ」

と、固く辞をつがひつつ、遽しげに後堂に撞と入たまひぬ。

陶の局は女児小菊を伴ひつ、殿堂をやがて退出けり。斯て宿所にかへりて後、胸に一箇の計略あれば、其夜、暗に一味の武士をつどへ、義忠を撃たてまつらんと手段をさだめ、「如此々々はからはば、加様々々になすべし」など、声をひそめ、額をよせ、閑談に時をうつし、既に更闌て、遠寺の鐘殷々と夜半をつげわたりぬ。

陶の局は翌朝の早旦より義忠の御前にいで、

「女児小菊を夾七夾八に言をつくし、宥つ偽寄つ口説はべれど、いかなる事にや、更に承応風色なく、賤妾も術を失へば、只一撃と思ひはべれど、実は義理ある女児にして、血をわかちたる子ならねば、後母の難面も殺せしなどと世人の言触さんも心憂、殊に若木の葩なれば、斫すてんも不便なれば、半朽たる老木の賤妾、かわりて自害をとげたく侍り。此条を免したまはば、黄泉の鬼となるとても、厚恩は忘れ侍らじ。君、此ことをゆるしたまはば、賤妾が此世の御余波に、日頃このめる猿楽の能の鉄輪の一手を勤めて、自害をとげはべらば、女児がささゆる障りもなく、後安く思ひ侍り。母子不便と思されて、この義をゆるしたべかし」

と、涙ながらに願ふにぞ、義忠もあわれにや思しけん、

「そは你が願ひにまかせん。吾も這世の余波なれば、脇を勤め得さすべし。疾、その准備をなすべし」
と、世にありがたき命にしたがひ、陶の局は最嘻げに恩を謝しつつ、稍て此を退きつ、其役々を触わたし、舞台の荘厳をなしにける。
蟋蟀は三秋を待て吟じ、蜉蝣は陰をもつて出るとや。時を窺ふ奸臣讒者、義忠が放埒懦弱の興に乗じ、飽までに媚へつらひ、陶の局の姦計に荷担し、既に前夜更るまで籌策を談じつつ、今日猿楽の能にことよせ、義忠はじめ忠義の家臣等、ことごとく撃とるべき手段をさだめ、囃子の役者、地謡方、過半一味に属たれば、『日頃の願望たつするは今此時』と雀踊し、時の至るを待居たり。嗚呼、義忠が命の危きこと、薄氷の上に彷徨、虎の尾を踏に異ならず。
されば舞台の荘厳は錦をもつて柱をつつませ、金襴の幕を掛ならべ、展布たる紅緑の氈、重たる猩血紅、翻飜（飜翻）と風に飄り、竜田の秋の風の手に丹楓ふきしく分野、眼を驚すばかりなり。程なく准備とととなへば、各、奇麗なる衣装を刷ひ、やがて能をぞはじめけり。義忠、脇の役なれば、先だつて出たまふ出扮は善つくし美を竭し、衣装、四面をかがやかし、諷声（颯声）、耳を清しぬ。陶の局も立出つ、能も半を過にけるが、並居る臣下、感心して首をかたぶけ心を空にし、ながめ入たるをりから、
謡「他心男を取て行んと、臥たる枕に立よりて」
と、謡につれて窺ひつつ、匿しもつたる懐剣にて只一刺と立より見れば、こはいかに、義忠みへさせたまはねば、吾を忘れて不審、おもわず躊躇あしもとに、謡も忽ち拍子ぬけ、をそろしや、傍辺よりばつと立たる相図の狼煙、ひとしく響く螺鉦太鼓、陶の局が耳をつらぬき、敵か味方か分たねど、心騒ぎつ胸とどろき、取次筋斗の足びやうし、
謡「三千番神ましまして、亡霊鬼神は穢はしや。出よ。出よ」
の声もろとも、許多の夥兵ばらばらと出来たり、舞台の四面を固み（囲み）、「動くな。やらじ」と鬨ぬ。

局をはじめ、一味の武士、「こは密計のもれたり」と推量ども、色目を隠し、さあらぬ風に陶の局、

「こはいかなる罪ありて、斯ははからひたまふぞ」

と、不審こなたの翠簾まき上れば、大内之介義忠、能の衣装引かへて、威儀堂々たる其形勢、左右を守護する累世の良臣、小具足に体をかため、肘を張て並居つつ、侍児小菊を縛めたり。陶の局は屡をどろき、舞台にどつかと坐をくみて、只忙然（茫然）と言なし。義忠、莞爾とうち咲ひ、

「今更なにの疑ひやあらん。心にをぼへぞありつらめ。去ながら、吾計略を語つて聴せん。そもそも你、館にはじめて来りしより、庸人ならずと察せしゆへ、鉄をもつて鉄を斤、橛をもつて橛を抜き、悪をもつて悪を除くの計策を廻し、武心を翻して王法を修し、身を放埒乱業のていに看せ、寅酉うかがひ、底意を試るに、一発種々の奢侈をすすめ、婬酒にふけらし、忠ある臣を遠離しめ、総ての行状、口に甘く、腹中に入て害をなす毒にひとし。去によつて一味の奸者を探らん為、佞人讒者をこしらへ、一味の徒党に加はらせ、本名を捜らするに、推量にたがはず、先年滅びし菊地の残党。まつた、時雨の桜の委しき説話に不慮いかりの顔色をあらわす形勢。吾、小菊に恋慕と見せ、旦暮くどき試るに、実は女子にあらずして、忠頼が遺胤の鞠稚丸。恋路に逼るを僥倖に猿楽能の促（催）し、由断（油断）を看すまし、吾をはじめ累世の家臣を撃とらんず籌策。うかがふ犬のありともしらず密計を明せしは、運命つくる期におよべり。迚も退れぬ。尋常に白状なして死につけよ。爾あらば、情に菊稚が命をたすけ得さすべし」

と、的をつらぬく義忠が言に、陶は無念の歯を齦、虹にひとしき息を吐、

「はかるはかると思ひしに、返つて此身を計られしか。斯露（は）る上からは、何をか襲まん。賤妾こそ、推量に違はず、鞠地家に仕官たる東屋と称し嫗なり。女児に窶し守たてしは、便ち稚公菊稚丸。をんな乍らも主君の怨を報はんと、故郷を去てここかしこ、漁村

に潜び、山林に蟄まり、千辛万苦に心を砕き、縁をもとめて当館に入こみ、しのびしのびに一味をかたらひ、驕をすすめ、婬酒にふけらし、『十が九、大望の成就の時いたれり』と、雀踊かひも情なや、年頃つもる恨みの数の鉄輪の鬼にひとしくも思ふ敵をとらで、剩、かくやすやすと看露されし残念さよ。此上は何かいとはぬ賤妾が命。速に死を致さん。其かはり、若君が助命をば、くれぐれ願ひはんべる」

と、悪風たる風色もなく、肌着の袖を引ききつ、自ら右の季指を齩きり、辞世か何か、白綾の片身の袖に鮮血もて最こまごまと書しるし、口にしかと噬つつ、懐剣ぬきもち片身なる右の袖に巻よと看しが、咽喉にがばと突たてつ、串かれてぞ死てけり。菊稚丸はかけよつて、別れの詞かはさまほしく思ふにまかせぬ縛めの縄、せんすべも泣伏て、前後も分で坐しける。執権内蔵之助、たちよつて、『いかなることやしるせし』と、死骸の口へ噬つる袖をとらんと数回引ども引ども、中々に堅く歯をしめ、放ち得ず。

「執念ふかき嫗が形勢。いで介借（介錯）して、其后、ひきはなつとも遅かるまじ」

と、帯せし刀、すらりと抜もち、ふり上るよと見へたりしが、頸は前にぞ落たりき。此時、ふしぎや、斫零せし首の口より白気いんいんと立のぼるに、『あら、怪しや』と数多の家臣、みるみるうちに一羽の白雁、王池中より顕はれ出、羽たたきしつつ白綾の片袖を足にかけ、雲井遼に飛上り、何地ともなく失にけり。

（挿絵2－②）

第四套　述懐雲井雁　敵眩葩吹雪

再説、鞠地家の勇婦と聴へし侍児小蝶は、先年、八ッ代落城のをりから、菊稚丸をともなひて東屋もろとも零行しが、不図も追敵にかこまれ、是を支ゆる其うちに、菊稚、東屋が往去をうしなひ、それよりさまざま貌を窶し、山路をわけつ海辺に至り、遠近を索ねもとむるうち、いつしか春の若草生いで、桐の一葉の落るてふ秋の風立、またもや春の梅が香をもてくる風

（挿絵２－②）

の便はあれど、捜しもとむる主従の有処をしるべき首は戦との風の便だに得ず。今は小蝶もたづぬべき手段をうしなひ、『せめて主君の亡跡を弔ふ為』と、故郷の肥後の国に立かへり、八ツ代の山中なる、時雨の桜に程ちかき巌窟の内に身を潜び、自ら熊阪の小蝶と綽名しつ、よりより闃を集むるに、累年怨を含る諸国の残党、ここかしこよりあつまり来て、都合凡七十余人、小蝶を魁首と称じ、貪欲非道に世を過せる武家、百性、町個などの方に乱入、そこばくの黄金をあつめ、軍用金の心的となし、あはれ主従に還会なば、籌策を一致にして大内の館に攻寄、亡君尊霊の意を安んじ、鬱憤の意霧を晴さんと、時をうかがひ、節をまち、天に憤り地にうらみ、牙を齧で日を送るに、歳月しばしも居まらず、時節流るるがごとく、愁ひにも速く移れば、嘆にも亦帰らず、一瞬の間に七年を経て、既に忠頼が七回忌の詳月命日にぞあたりぬ。頃しも晩春の中旬にて、空うららかに晴わたり、四方の山の根、霞たなびき、眺望も殊に勝りしかば、小蝶は巌窟を立出て、属徒の党に鋪革をのべさせ、傍辺の小高き巌上に菊稚丸の遺器とて預け給ひし鏊をかざり、是にそへたる百夜てふ名香をあやしの香炉に捻りつつ、ここに坐して合掌し、稍しばらくして属徒に命じ、日頃手馴し琵琶一面をとり出させ、尊霊の心を慰めんと、峰の松ふく融風に調べを合し、一曲を弾じける。

〈桓武帝より伝はつたる平安城、木曾義仲に追はら
はれ、爰ぞたのみと一の谷、鵯ごへより真逆さ

ま、ここも義経に追落され、御一門は風波の御難。平氏の運の傾きし、身の成はてぞあはれなる。

小蝶はしばし梶をとどめ、はらはらと涙を流し、「這唱歌を諷ふにつけ、思ひ出さるる七歳まへ、忠頼、御運つたなくして大内の多勢に責立られ、竟に自殺し果たまふ。其御無念は嘸かしと思へば胸も裂ここち。せめて稚君主従に還会なば、共に天をいただかざる、亡君怨敵大内を亡し、霊前に手向（挿絵2－③）ばやと、心は弥猛とはやれども、時至らずして往去を需めず」

と、涙ながらに亦かきしらぶる琵琶の歌。

〈去程に平家の一門ことごとく西溟の波濤に漂ひ、今は角よと見ければ、副将軍平の知盛、衣甲に立箭、披箑毛にひとしく、君の御船へ撞とまいり、「今のまに珍しき東男を御覧にいれん」と、呵々と打咲ひたまへば、御供に伺公せし上総の忠光、衣甲綱に喰付て血の涙を流せしは、所理にもまた

（挿絵2－③）

便なけれ。

と涙ながらに調る時から、雁鳴かすかに音づるるに、小蝶はしばし楔をとどめて見あぐれば、霞わたれる蒼天、さながら絵がごとくなる。雲井はるかに一羽の白雁、軒翥しげく飛来り、看々うちに漸に下り、盤をかざりし巌のほとりに翅をやすむる形勢に、小蝶はこなたを佶と看やり、

「夫、雁に四徳あり。寒ずるときは北よりして南にし、熱きときは南よりして北にするは、其信なり。飛ときは序あつて、前に鳴ば後に和す。其礼なり。偶を失へば、再び配せず。其節也。夜は則ち群宿りて、一奴巡警。昼は則ち芦を啣へて繒繳を辟。其智也。而、捕るはこれを豢て媒となして、以て其類ひを誘ふ。是則ち一愚なり。又、鴉は水をもつて言。北よりして南にす。鴉は山をもつて言。南よりして北にす。凡そ中秋、白雁、先来つて、雁金、これに次。真雁、又、これに次て遅し。仲春、真雁、まづ帰つて、三、四月に白雁、帰る。俱に雌雄相並びて行烈(行列)をなすごとし。偶をうしなへば則ち、唯一羽来往するのみ。凡、夜、止宿の中、更る毎に居を換る。これを打更といふとなん。這白雁はただ一羽ここに降つて犹を休むるは、其ともを失ひしか。亦は傷を蒙りしか」と、近前よれども立もやらず。『故こそあらん』と詹仰るに、品は何かは白妙の絹の一斤を足にかけたり。『偖は』と心に点頭つ、羽を押へてこれを取に、動きもやらず足なる衣を離ちつつ、いと愛褻気なる形勢なりしが、稍あつて敲きし、天を望んで飛よと看るうち、就地白き煙となつて、迹かたもなく消うせぬ。是すなはち、大内の館に滅びたる陶の局が亡霊なり。

二説、大内の楽官桂木照人清澄は、主君義忠の命をうけ、時雨の桜の有処をもとめんと這山ふかくわけ入て、此面彼面と看繞すに、巌そばだち石屏峨々と縱、路羊腸に廻りたり。谿間を遼に眺むれば、白雲に埋むがごとく桜の葩爛熳たり。

『さては此谿間に夥の花の見へたれば、其中にこそ索ぬなる名樹こそあるやらん。此とはしらで嶺高く登り

来しこそ不覚なり。いで、彼地にいたらん』
と、猪狼の径より蔓株に手をかけつ、下らんとなす時しも、爛熟たる花香ならで、ゑならぬ香の薫り、岑の嵐にさそひ来つ、幽かに聴ゆる琵琶の音に、照人は耳を峙て、
『あな、不審のことどもかな。樵夫も稀なる深山路に霊香のかほり芬々とし、琵琶の音のきこゆるは、恁なるものの栖居なるや。こころゆかじ』
と、をもわずも、香の薫りと琵琶の音にひかれて此方に路をかへ、険しき巌をつたひつつ、尚、山ふかく分いりぬ。
却説。小蝶はかの白雁の携来りし白妙の衣を携へ、煙の往去を詹仰り、
『往昔、越の范蠡は鯉書をもちひ、前漢の蘇武は雁の翼に文を属、武帝の素懐を休んずとや。若、その類ひに有もやせん』
と、能々みれば、白綾のかた袖にて、鮮血をもつて細に文をしたためたり。益々あやしみ読くだすに、豈はからん、是正しく日頃たづぬる東屋が遺書にして、
「先年、八代落城の砌、をひくる敵にささへられ、不慮互ひに別れ、鳥の翼を失ふごとく、稚君をともなひ諸々に漂ひ、厥后、大内家にかかへられ、陶の局と称れ、主君を女児小菊となし、義忠に奢侈をすすめ、奸佞の家隷を閲になびけ、亡君の怨を報はんと思ふに、甲斐なく密謀あらはれ、大内の館にむなしくなり、主君も擒となりたまへば、火速これを援けまいらせ、賤妾が宿恨を晴してたべ」
と微細にかきつけたり。小蝶はよむたび涙をもよほし、胸とどろき、歯齦をなし、或は怒り、あるひは歎き、
「さては大内の館に入こみ、かほどまでに心を砕き、怨敵を撃んとはかりしか。吾はそれに引かへて、忘却とにはあらねども、還会べき術もなく、此年月を化にくらせし残念さよ。さまで遠かる国ならざるに、灯台かへつて本くらく、今までしらで過つるこそ不覚なれ。さぞな、亡君尊霊の泉下にて悪ませたまはん。

かかる便著を得し上は、しばしも猶予ところにあらず。周防の国に立こへて、稚君を援けまいらせん」
と、勢ひふくむこなたの岩陰、桂木照人清澄は、前刻よりここに瀏り来つ、しのんで風色を窺ひしが、
『前後つばらに分たねど、主君に怨を含めるありさま。紛ふかたなき菊地の余類』
と察せしかば、
『いで、撃とつて本国への土産になさん』
と踊り出、帯たる刀をすらりと抜もち、
「主君に仇する鞠地の残党。首撃て土産にせん。覚悟せよや」
と詰かくる。不敵の小蝶、些しも騒がず、
「小賢しくもよく言たり。推量に違はず菊地の残党、熊坂小蝶とよぶものなり。そも、你は恁なる僕ぞ」
「ホホウ、不審な最。小的こそ大内の楽官、桂木照人清澄といへる者。主命によつて此山中なる時雨の桜の有処を索るところに、不図も名香の薫りといひ、琵琶の音のいぶかしさに、石路をたどり此に来り。はからず聴得し你が陰謀」
「さては密事を聴つるよな。労ましながら這上は生死にをよばん、覚悟せよ」
「しや、ものものし」
と照人清澄、撃てかかるを、小蝶はものの員ともせず、搔くぐりつ身を撚り、傍辺にありあふ琵琶にてさへ、霎時たがひに廁殺しが、所謂勇力無双の小蝶なれば、清澄が焦燥て斫こむ鋒をかわして早速にうち零し、小臑とるよと見へたりしが、飛礫のごとく谷を望で抛つけたり。愍むべし、清澄は千仞の谷へ円なる石を転すがごとく躅び零たり。小蝶は莞爾と笑を含み、
「よしなひ青額が腕立に、あたら命を谷底の巌の苔となしつるよ」
と、遼の谷を眺めやり、稍てこなたを顧るに、ここに一管の横笛あり。
『さては、彼若者の所持なす横笛ならめ』
とて、携上みるに、世の常ならぬ名笛なり。熟々まも

り、
「是こそは、吾、かねて聴をよぶ大内家の重宝たる春鶯と号し名笛にたがふまじ。這一管を吹ときんば、黄鳥、夥あつまるよし。是は世俗の虚言か、亦は奇瑞を看するにもや。いで、試ん」
と、歌口に舌なめずりしつ吹いだせば、奇異なるかな、許多の黄鸝むらがり来り、囂きまでに囀る分野、『希代の珍事を看ことよ』と、霎時ながめて彷徨ぬ。
去程に、照人清澄は、小蝶がために夥しき千仞の谷に抛落され、全体巌に的りて膳をうち、即地に悶絶ふしたりしが、ここぞ清澄が索ぬなる液雨の桜の樹下にして、爛熟たる葩より浸る露の、融風に吹はらはれて斑々と降かかる一滴の露、清澄が咽喉に入て、俄頃に甦生し、眼をひらきて四面を看れば、樵夫の女児と思しくて、年齢は破瓜を過ざる婦、月白の手蓋行縢を紅紐もてしめ、桜の花を彩染し木綿布子を着し、頸の髪は解しまま後にたれて乱たれども、容顔いと宛転に麗しく、賤しからざる風俗なるが、草刈籠、竹把などを傍辺に棄、さまざまと介抱なし、艶しき声しつつ、
「心地はいかに坐するや。気をたしかに持たまへ」
など慇に索ぬるに、照人、いためる身を起し、裂たる小袖の土うちはらひ、
「是はそもいかなる人なれば、助けたまはる有難さよ。礼は辞に竭すまじ」
と、（挿絵2－④）数回再生の恩を謝するに、
「爾ばかり宣ふことやはある」
と、尚も痛手をいたわりつ、
「何ゆへかかる渓底へ躅びて落はしたまふぞ」
と索ねに、照人、膝立なをし、
「微細に説話ば最永きことながら、小的が主君と托む御方の、今般新に殿堂をしつらひ、和漢の良材、数をつくし、普請なかばを過たるが、寅酉、主侯の所望には、世に並びなく名に高き桜木をもて席上の床板となしたまはんと、屢捜しもとむれど、大木なれば名樹

（挿絵２－④）

にあらず。名だたる桜は梢細く用材にならざれば、空しく烏兎を過す所に、此八代の山中に霰の桜と号し名桜、世にならびなき大木と聴しめすより、小的に有処をもとめ来れよとの命によつて、遙々と此深山路に来りしが、如此々々のことありて谷底に抛堕され、既に黄泉の鬼となるべきを、不慮をんみの情によつて、再び此世に甦生れり」

と語るを聴て、賤女も、

「さては液雨の桜木を索ねたまへる人なるか。それこそ是なる桜にはべり。をんみの咽喉を潤せし露は、すなはち葩より霤り落し雫なり」

「さては此桜木が、命を蒙り索ぬなる名樹にてありつるか。前刻より倩々ながむるに、ただならざる樹と思ひしも宜なり。有繋は菊地忠頼の寵愛しも所理なり。さればこそ別れを惜み、涙の露の滴りし。花、ものいわねど、希代の名木、そのうへ、茲に悶絶し吾咽喉を潤せし露は、慈童が菊潭に齢ひを延し川水にも勝るとも、よも劣はせじ。いかに主命なればとて、人も慙べ

き情といひ、見れば看るほど枝ぶりも、葩の色香も余木にこへ、一しほ勝る麗しさ。たとひ条のはしたりとも手折ることのなるべきか」

と、眺入たる形勢に、賤女は最うれしげに、

「葩を惜み、樹を労はるやさしき今の言の葉に、苟き身にもおこころの想像れて最愛や。深山がくれの狂花、たれとふ人もなき身のうへ、斯る命のあればこそ、物の情をしろしめす優しき君に会ことよ」

と、いと惚々と照人が顔うちまもり、余念なく心ありげの風情なるに、岩木ならねば照人も、一かたならぬ賤女が厚き情と深山路に最奇かにも麗しき貌にをもひ桟や、ふみは返さぬ艶男、あだし心の「他なりと名にこそ立れ桜花」と吟ずる古歌の上の句に、婦はこぼるる眼首の愛、「としに稀なる人も待けり」と下を続けし風雅たる心にゆかしさ弥まして、看やる眼首の塩竈や、恋の初花さきそめて、顔に彼岸の糸ざくら、一重に慕ふ山桜、八重に思ひの重りて、一樹の陰の宿りにも他生の縁の糸ぐくり、手折ばをらす花ごころ、其枝ぶりに照人も骸の痛手さへ忘却、をもはず互ひに寄そふ時から、小蝶が属下の強盗等、岩陰よりあらはれいで、

「絶頂より魁首に抛零されて五体ともこな微塵と思ひのほか、命冥加な楽官め。うぬが生死を見とどけよと命をうけて来りしぞ。いけてはかへさぬ。覚悟せよ」

と、強気の山賊、だんぴらひきぬき、痛手になやむ照人を中に囲んで動かせず。照人をどろき、

「さては前刻なる山賊の女が属下にて有つるよな。いで、返報をなさんず」

と、刀抜もち立あがれど、進退自由ならざるに、渠等はいわゆる血気の壮士。なにかは以て対すべき。既に危く見たるをりから、奇怪や嶺より一陣の風、颯と吹来て桜木に的るとひとしく、爛熳たる葩、一時に斑々々と透間もあらせず散かかる花の吹雪の白妙に、前後も看へずなりしかば、有繋に猛き山賊（山賊）も眼くらみつ途をうしなひ、「是は是は」とばかり、花

につつまれつ、呆れてこそは漂ひぬ。

女熊坂朧夜草紙　巻之弐　畢

女熊阪朧夜草紙　巻之三

摂都　暁鐘成　戯作併画

第五套　船閃藻切鎌　宙漂廃藤簍

善策を務る者は悪事なし。遠慮なき者は近き憂あり。

茲に大内之助義忠の伯父なる人に、多々良典礼弘茂といへるあり。是は故修理之助義廉の舎弟にして、山口より凡三里余を阻てし放鹿が丘とよべる地方に采地を領せられしが、性得よからぬ性にて坐せしかど、今、義忠の伯父の殿なれば、山口に来りても家臣の上下、たれあつて敬はざる人とてなし。しかるに、義廉長逝て後、密に逆意を発し、甥義忠をなきものとし、山口を押領せんと奸心邪智を廻す時節、不図も陶の局が謀叛によつて義忠、武道を失ひ、奢侈に長じ、婬酒に耽り、政道就地乱れしかば、『手を下さずして僥倖を得たり』と、屢よろこび、「義忠、乱業なり」と世に言触し、伯父の威をもつて是を罪し、吾領せる放鹿が丘にをしこめ、自らかわつて山口に入城し、日頃の所望を達せんと謀りし術の齟齬ひ、義忠、まことの放埒ならず、臣下の邪正を糺さんための籌策にて、竟に陶の局も自害をとげ、菊稚を擒となし、菊地の余類、諸国の残党、根を断、葉を枯さんと国家の政道厳なれば、典礼弘茂、のぞみを失ひ、猶、邪智を惟し、滋計に肝胆を砕き、寅酉胸も易からざりしが、此に一手段を得て、一日、家に伝はる遠霞の一巻と号し忍術を記せし秘書を懐にし、近曾暗にかかへ置し、蜻蛉煙三といへる、血気の家隷をつれ、其余、両三個の従者を倶し、春の蒼海を眺望せんと、多々良の浜辺にぞ至れり。

そも此多々良の浜といへるは、放鹿が丘より程遠か

らず、後背は山嶽峨々と聳へ、前は蒼海渺々満々として、潮路を戸渡る蜑小舟、ほのかに看へ、澳の白洲になく海鷗の余、眼に遮るものもなく、平生に磯うつ濤あらければ、漁夫海士の栖居もなく、磯馴松の株高くあらわれ、枝かたぶき、這方那方、間荒に生るのみなれば、密事を談るに最上の地なりとて、典礼弘茂、煙三を卒（率）て、此方に来にけり。供せし家隷は彼方なる斗飲の里にのこしをき、煙三一個ともなひつ、案が根にこし打かけ、言やう、

「你をここに伴ひしは、余義にあらず。予て語れるごとく、義忠を失ひ、山口を握掌（掌握）（挿絵3－①）せんと思へども、時いたらずして空しく月日を過せり。しかるに一の籌策あり。最くだくだしき事なれども、微細に言聴せん。抑、大内の家は大明国、琳聖太子の末流にして、代々大明国より珍宝名器を献上せり。其中に重宝と尊めるもの、蒼鹿の革に過ず。是、すなはち、千歳を経し蒼き毛色の鹿革なり。ここに又、皇都室町武林家に伝はる殿の香炉といへる重器

（挿絵3－①）

あり。是また和漢にならびなき名香炉にして、所持なす主に凶事ある時は、就地に音を発し、危急を告る。其音、まことの鹿にひとし。しかるに、爾程の名器なりといへども、彼蒼鹿の革をもつて香鼎に覆ふ時は、音を発すること能はずと、密に聴をよべり。又、此等の二種を奪とらんには、一妙術あり。そはこれなり」

と、懐にせし一巻を携出し、

「こは、吾家に秘をける遠霞の一巻とて、種々の忍びの術をしるせし秘書なり。你、閲して会得なし、山口の城中なる宝蔵にしのび込、かの蒼鹿の革を盗み出すべし。其宝蔵は御殿より巽に的つて小高く見ゆる、奇麗なる白壁こそ宝をこめし処なり。此一条を仕をふせなば、即地に京師にのぼり、室町なる花の御所に荘りある麝の香炉に此蒼鹿の革を打きせ音をとどめなば、奪ひとらんは輒かるべし。爾して后、此革を程よき所に棄かへらば、世に聴へたる大内の重宝なれば、義忠に疑ひかかり、言ひらくべき縁故なければ、自滅さすは必定なり。厥后、吾、詮義し出せしと披露なし、香炉をさし上、義忠が罪を賠話なば、大内の家国相続は其賞功に賜るべし。しかる時は、褒美は你が所望にまかせん。何にまれ、首尾よく仕負せくれよかし」

と微細に説談ば、煙三、横手をはたとうち、

「奇なり。妙なり。今にはじめぬ主君の計略。賢意やすかれ。僕もかねがね忍術には心をかけ侍れば、日を経ず山口の城中にしのび入、蒼鹿の革を奪ひとり、稍て日頃の御望みを達し奉らん」

と最たのもしく承応に、弘茂、しばしば勧喜（歓喜）つつ、猶も密談に時を移し、春の遅日も稍西山にかたぶき海面に輝きしかば、弘茂も心つき、

「従者の嘸待わびなん。吾は先て館に還るべし。仗は山路の捷径より家に帰れよ。必らずともに此条を治定と言わたせしぞ」

と言すててこそ、弘茂は礒の真砂を蹴立つつ、遽しく斗飲の里に趣きぬ。煙三、あとに彷徨て、『這一

巻の秘術を会得し、何でも天晴、一手柄』と、懐中におさめながら山路をさして還らんとす。

此時、いつの間にか漂ひよりけん、渚に苫を深く葺し蜑の小舟の看たりしが、乗棄し虚舟と思ひのほか、主はたれとかしらねども、舟中より蜑人が朝夕手なれの藻切の鎌、ひらめき出ると看へたりしが、此方に飛で煙三が心前にはつしとたつ。何かはもつて溜るべき、就地、磯辺にどうど倒れにけり。げに、名にをふる蜻蛉の昏をまたで死したるは、哀はかなき体のはてなり。

苫掻やりつ徐々と磯に上れるものあり。豈料や、是すなはち熊坂の小蝶にてぞ有ける。南蛮鉄の鎖帷子に身を固め、上にはゆゆしき装束を着せり。稍て屍の傍に立より、懐中にせし一巻を奪ひとり、紐を解々打被（披）き、首尾を微細に読下しつつ、さも嬉しげに独言、

「をもはず手にいる忍術の一巻。是をもつて大内の館に忍びいり、稚君を奪かへし、渠等が談れる蒼鹿の革を盗みて皇都にのぼり、如此々々に計らはば、手を下さずして大内の滅亡。あら心よろこばしや」

と、莞爾と笑を含める形勢、柳の眉に花の貌。こころは鬼をも拗げる勇婦。をりから遠の山寺に春の昏を告わたる晩鐘仄聞ゆるに、岑上の桜、霏々と散こそ花の穠なる。此時、いづくに忍びけん、許多の属賊、むらむらと渾一容の緇装束、肌には鎖の帷子を着し、強盗提灯を手々にたづさへ出きたり、「魁首」と声かくれば、小蝶は四面に眼を配り、「声高し」とぞ制しける。

且説、大内之助義忠は姦臣讒者を滅亡さんため、意にあらぬ婬酒にふけり、竟に陶の局が叛逆を見あらはし、是に属せし一味の党を悉悉誅罰し、尚、残党を捜らんと菊地忠頼の遺胤なる菊稚を擒とし、奥まりたる殿中に居らしめ、許多の侍児にきびしく護らせ、夜は不寝番をつけ、是を媒に偽引よせ、敵の根を断、葉を枯さんと手段に怠りなかりける。

熊坂小蝶は多々良の浜にて煙三を手にかけ、遠霞

の一巻奪ひ、忍術の奥儀を会得せしかば、時日を移さず、一夜、山口の城中に忍び入に、頃しも春の朧夜なれば、忍ぶに一しほたよりよく、弘茂が説話し殿堂の巽に的るてふ堅砌礫く帑の壁斫やぶり裡に入、数の重器の其中にて、辛ふじて捜し得つ、蒼鹿の革を懐中にし、斫破りたる白壁の穴より亦も潜り出、尚奥ふかく忍びつつ廊下を抜、築山をこへ、『池の蛙のしばなく音を止なば、宿直の武士やさとらん』と、指脚抜足うかがひうかがひ、既に後堂の傍辺に至るに、夜は更闌て、はや丑三の時分なり。四方の扉をかたく閉たれば、『いかがして裡に入ん』と、左袖右袖思慮をめぐらすに、菊稚を取かへすべき時至りけん、一個の侍女、雨戸をひらき、手燭を携へ、圃にいたる風色なれば、『是、僥倖』としのびこみ、両辺と尋ぬるに、菊稚、殿中の上席に臥たまひ、許多の侍女、四面に臥たり。睡の術をおこなへば、不寝番なる武士も前後もしらず熟睡たり。『何をがな、稚君を入まいらせ、後背に負還らんものを』と、有あふ手燭に灯をうつし、是を携へ侍児等が部家とおぼしき処にいたるに、傍辺の隅に古びたる藤簍のあるに、『こは宜器よ』と、蓋をひらくに、婢女の副衣とみへて苟しき布子二衣三衣あるを、手疾く打あけつ、携へかへりて熟睡たる菊稚を揺起せば、「誰」とおどろき眼醒したまふに、小蝶は意焦燥ながら耳に口よせ荒増を言聴へ、軈て藤簍の中に入、蓋をなしつつ、紐もて後背に負をりしも、一個の侍児、眼をさまし、菊稚には意もつかず、素より小蝶が貌も看へざれば、癈藤簍のみ眼に遮り、『希有なることよ』と、隣に臥す頬高面なる侍児を、「桔梗、桔梗」と揺をこせば、気疎顔しつ眼をさまし、是も斉しく驚けば、両辺に臥たる侍女、こちらが起せばあちらが眼さまし、「柵」「伏屋」「雛絹」など、渾こへごへに呼をこし、寝ぼれたる眼を摺ながら、「こは興がることよ」とて、声をも立ず怪みつ、只忙然たるばかりなり。小蝶は徐々藤簍を負ひ、殿中を立出れば、異容なる面をしつ、許多の侍児、後辺に順ひ、

「あれあれ、つづらが宙あるく。歩行は歩行は。藤簍が宙を歩行よ」
と、婦が口の喜く、囃がごとくなりしかば、小蝶は最も可笑さに、回顧つつ彷徨て、
「いたく寝惚し眼ざましに、藤簍をふたが可笑ひか。賤妾が貌は見へざるか」
と打微笑て立出しは、大胆不敵の行状なり。

第六套　顕奇瑞鹿革　打破轎手銃

却説、放鹿が丘なる多々良典礼弘茂は、良党煙三を小蝶がために害せられ、剰へ、遠霞の一巻まで失ひしかば、『いかなるものの所為なるや』と、屢詮義に怠らず、易き心もなかりしが、山口の城中に曲者しのび入、蒼鹿の革を奪ふのみならず、擒とせし菊稚さへ盗み出せしと聴より、
『偖は菊地の余類の党、吾密計を聴、かくは手段の裏をかきしか。爾にても多々良の浜辺にて、人の聴べき容なきに。不審ことかな』
と思へど、其甲斐あらざれば、『山口の騒動もきき棄ならず』と、鞍馬に鞭を打て即地に馳付、評義の例（列）にくははりて、倶に力を添貌なり。
山口の城中には、義忠はじめ許多の良臣、首を傾け、『等閑ならざる一大事』と、一統肝胆を砕きけり。
茲にまた、熊坂小蝶は菊稚を援け出し、夫より周防を立去て、石見の国なる鷹爪山に身を潜め、許多の属下を菊稚君に傅かせ、日を経ずして両三個の属賊を携、旅客の姿に身をやつし、皇都にをもむき、室町の辺を徘徊し、足利の館の風色をうかがひぬ。既に京都に着てより四、五ヶ日を過せしが、一夜、春雨そぼ降つつ、最暗ふしてものの黒白もわかちがたかりしかば、屈竟の夜なりとて、属下を順へ、潜びやかに出たち、渾、門外に待せをき、鈎縄をもつて硎に打かけ、是をつたひ登る事、恰も猿の梢をつとふにひとし。難なく向方にひらりと飛下、殿堂まぢかく忍び入、奇術をもつて人眼を眩まし、漸にふかくしのび込、御次間

までいたれども、宿直の武士かってしらず。『仕すましたり』と心に点頭、つひに御居室の際にいたり、裡の風色をうかがひみるに、殿中は金銀を鏤め、薫香、翠簾の外面に芬々洩て、看に眼にさへぎり、聴に鼻爽なり。上壇には武将義持朝臣、よく目睡せたまひ、傍辺には重器たる彼廓の香炉を唐木づくりの卓子にのせられたり。

『偖は是こそ聴つたふ名香炉にこそ。先、蒼鹿の革の威徳を試ん』

と、さし脚ぬき足候ひより、懐中にせし革を出し、此方より是を目的に彼方へひらりと抛かくれば、寃ひ逃さず、すつぽりと名香炉にかかりたり。斯て近前たちよれど、希代の革の奇特にや、世に並なき名香炉といへども、一声だに発することなく、鼻息さへも做さざれば、『して遣たり』と笑をふくみ、革をもて襲みとり、小脇にいだき、義持卿の熟睡の形勢を詹仰、しばし彷徨いたりける。此時、武将の御身の上、最あやふきこと、風の前の灯火のごとし。しかるに御運つよかりけん、不慮もふと眼を（挿絵3－②）覚され、這風色を看玉ふより、忽地がばと起上り、太刀をつとりつつ大音に、

「曲者しのび入たるぞ。党等きたれ」

と宣ふに、有繋の小蝶も大に駭き、『こは仕損ぜし』と身を翻し、次間までのがれいづるに、宿直の武士、眼をさまし、「曲者やらじ」と両手をひろげ、後辺より無手と組。「しや、ものものし」と身を捻り、組だる腕をはらはんとなせども、此方も力をきはめ、強くいだきて離さばこそ、寝ぼれし武士、四方より吾一に搦とらんと立かかる。

「是は小賢しき寝労武士。ならば手柄に捕て見よや」

と、あたるを僥倖、引つかみ、前後左右に人飛礫。いだきし武士はいらだちて、「早く捕よ」とあせれども、腕、腰、膳をつよくうち、起上るさへ只ならねば、虫の蠢に彷彿たり。

『此ひまに脱れずば搦めとられん大事ぞ』

と、小蝶は一生懸命の金剛力を発しつつ、拳を固めて

（挿絵３－②）

後形にいだき止めし武士が首も砕けと強く撃。何かはもつてたまるべき、眉間やぶれて滴る鮮血、眼に入て眩しかば、組とめたる腕首も些しくゆるめば、この透に小蝶は『得たり』と身をふりほどけば、「南無三宝、眼はみへねども逃さじ」と、又とりつくを払ひのけ、縁側よりひらりと飛をりしが、貌は看へずなりにける。此方は『曲者の袖ぞ』とをもひ、両手をもつて治定とにぎり引とどめしが、袖にはあらで彼蒼鹿の革なりしかば、後辺にどうど倒れたり。後駆に許多の良臣、われもわれもと蒐つけつ、此分野を看よりも、大に駭き、夥兵を着令し、八方に手くばりなし、「搦め捕よ」と鬩きわたり、提灯、続松すき間もなく、恰も白昼のごとくにて、詮義厳なりしかど、曾て往去はしれざりき。痛手の武士等はさまざまと介抱なし、金瘡治療をこたらず。

既に執権山名、細川をはじめ、斯波、畠山、其余許多の諸臣、かくと聴より疾く雲霞のごとく駆集り、宿直の武士を召よせられ、曲者の面体、貌な

ど微細に聴ただし、屡々評義ありけるが、証拠となるべき一品は蒼鹿の革にして、大内家の余、蔵すべき器ならねば、

「予て大内之助義忠、放埒乱業のきこへありしかば、全く逆心の企て。凶変を告る香炉を奪ひとらせ、其後、武将を弑し奉らんと計りしものならめ」

「否。大内家に怨ある党、義忠に罪を蒙らせんと斯はからひし物ならん」

など、評定まちまちなりしが、

「何にまれ、周防の国に使者を立られ、糾明あらば善悪とも明白なるべし」

とて、旧臣たる暗辺右馬之尉教勝に使者の役を命ぜられける。教勝、命を謹で承り、即地に行装を做しつ、許多の従者を倶し、周防を望て発足す。

晩春の天うららかに、海山ともに風景、平日に勝れども、並々ならぬ役目なれば、四面の眺望に眼もつかで、山路をこへ磯をつたひ、只管道を急ぐ程に、行程よりは日を経ずして石見の国に着し、今一日にて周防の国にいたりなんと言るに、従者もひとしほ勇みたち、泊りの駅路に間もあらざれば、烈（列）をただし、福川の此方まで来かかるに、既に日はくれたり。径ほのぐらき宵烏夜を凄る後辺の松陰より、筒音高く飛来る鳥銃。家隷が膳を摺傷りて、右馬之尉が乗たる羈轎子の戸を砕くばかりに彼方へ磯と打抜たり。裡には「苦」と叫ぶこへ、倶に浅痍の従者も灸所なれば踏もこたへず、響に応じて倒れけり。許多の家隷は胆を消し、轎夫は轎子を投をき、或は鎧櫃をすて、鎗、挟匣を投つけつつ、双松の株に踢き、石に蹉し、蛛の子を散すがごとく東西に逃失ぬ。

をりしも月もあなたなる山の端よりさし出て、白昼と疑ふ皎さの影をいとひし潜びの装束、しげりし松の傍辺より徐々出る一個の曲者。鍪頭巾に面を裹、野袴に鞭指外袍を着し、以加物作の両刀を帯、鳥銃たづさへ出来り、轎子の戸を蹴はなすをりしも、家隷と見へて許多の人数、おのおの緇き装束にて出来り、「御迎ひ」と告るにぞ、点頭つつも声を潜め、家隷に

命じて落散たる具足櫃、鎗、挟箱のたぐひまで悉 悉奪とらせ、先に立せて火急せつ、後を押へてしたがひゆく。

かかりし程に、又もや松の茂みより、前刻に逃たる従者と思しき男、「曲者まて」と声かくれば、彼曲者は駭きながら回顧つつ、小柄ぬきとりはつしと撃たる早速の手裏剣。こなたはもつたる菅笠にうけとむれば、曲者は『仕損じたり』と、疾く後をも看ずして逃去ぬ。

慈将の下に仁者の栄る事、春花の雨露を得て綻ぶがごとし。悪将の下に義者の滅ぶる事、秋草の霜を得て矮がごとし。

さる程に周防の国、山口には、京師武林家より上使と有て、暗辺右馬之尉教勝、城下口まで着せしよし、執権内蔵之助に注進す。景行、それぞれに家臣に命じ、出迎の格例をごそかに、稍て城中にともなひ入。右馬之尉教勝、しづしづと上坐になをり稍久しく、上使の例式をはつて後、上使の趣、微細に演説し、

「義忠野心の企あるに違はじと並々ならぬ御疑ひ。それゆへ態々参着せり」

と厳にぞ演たりける。義忠はじめ並居る家臣、たがひに面を見合せつ、片吐をのんで息をつめ、霎時ことばもなかりしが、執権内蔵之助、謹んで、

「武将よりの御疑念の条々、恐れ入たてまつれり。然るに当家の重宝たる蒼鹿の名皮は宝蔵に秘置はべるに、去ぬる夜、何者ともしらず、帑の壁斫やぶり、忍び入、奪ひ取て立退きたり。去によつて其夜をはじめ、今に至つて厳に詮義をこたる日とても非ねど、未、曲者の手がかりを得ず。爾るところに今日の御上使。また駭きを益はべり。何卒、上使の情をもつて、曲者を搦捕り糾明をとぐる迄、しばしの猶予を願ひたてまつる」

と、誠心を面にあらはし、只管日延を願ふといへども、教勝、些しも承応ず、呵々と打わらひ、

「実や、玉池は重宝なり。鷺を烏といひくろめなばく

ろめなんが、教勝一個、その手は喰じ。照拠となしたる蒼鹿の革は先だつて失しとばかり、帰つて返答なるべきや。よし、武将に啓すとて、いかでか誠とし給はん。武士の情に一時間の猶予はなすべし」

と、威長だかになつて罵れば、義忠、景行もろともに怖れ入て辞なし。家臣の面々、手に汗にぎり磬たり。

此時、伯父たる多々良典礼弘茂、義忠を弔（訪）ひ来て、斉しき席に並居しが、苦りきつたる面色しつ、

「天暗ければ地濁り、主独正しからざれば、下万民、仁義直ならず。渾、太平の化に誇り、驕を究め軍務に懈怠、君臣ともに踊り狂ひ、昼夜婬酒に耽るが故、家の政道厳ならず。さればこそ斯る災禍も発きたれり。武将の厳命は点止（黙止）がたし。当家の存亡、今一刻の間を過さず。立んとも倒さんとも、義忠が心一にあり。とくと深慮をこらされよ。あな、笑止千万」

と嘲み笑ふを、忠義の臣等、

「こは片腹いたき伯父君の命。君臣ともに軍務に怠り、昼夜婬酒に耽るとは何ごとぞや。君の放埒乱業は滋臣讒者をさぐらん為、悪を以て悪を除くの籌策。しかるを何の遠慮もなく、上使の御前で聴がしの出るまま の雑言。今一応のたまはば、其悪言の舌の根を抜まいらせん」

と憤れば、典礼弘茂、をほひに怒り、

「当家の伯父たる吾にむかひ、過言至極。さらば手柄に斫て看よ」

「其権柄が尚、忌はし」

と、双方たがひに詰かかる。両虎犬つて牙を咀に異ならず。内蔵之助は是をささへ、

「こは不覚なり。御上使の御前といひ、国家存亡せまれる日に、私の争論は上を怖れぬ行状ならずや。伯父の殿にも怒りをば鎮めたまへ」

となだめつつ、上使に対ひ、

「愚臣、些ばかり想ふ子細もはべれば、一時間のあいだ、後堂にて長途の労れを休らはせたまへかし。後刻、有無の返答を言上たてまつらめ」

と告すにぞ、教勝うなづき、
「爾あらば、数日の羈路の労れをやすめん。時を移さず返答あれ」
と辞をかたく双ひつつ、長袴ふみしだき、「誰、案内」と立上れば、許多の侍女、こころを得て、「斯、入らせたまへ」とて、前と後にしたがへば、上使はまんまと仕済し貌。舌なめづりしつ侍女等に案内せられ、のつさのつさ長き廊下を歩みゆく。典礼弘茂も教勝が饗応せんと後辺にしたがひ、後堂さして至りけり。

跡には義忠、内蔵之助、其余累世の良臣等、「武将への言訳の術もがな」と深慮をめぐらし、沈吟に頸を傾むくれど、左袖右袖も紛失の照拠なければ詮方なく、内蔵之助は沈吟を定め、
『主君にかわり切腹なし、死をもつて今しばしの日延を願はんにはしかず』
と独り心に点頭つ、『願書を認めん』と、ここを立て退きぬ。

実や、勁松は年の寒じきに彰れ、貞臣は国の危きに見はるとは、此時ぞ思ひ的れり。義忠にも言ずして、内蔵之助の心にひとしく腹掻きらんず心にて、其准備を做したまふ。嗚呼、世の転変、瞬目を廻らさず。今、国家存亡の危き事、虎の尾を踏で山に登り、破し船に棹さして大海をわたるがごとし。

早、時うつれば、上使教勝、しりへには典礼弘茂もろともに出来り、「返答いかに」と焦燥る。義忠、謹んで上使にむかひ、
「吾、凶運にして家の宝をうしなひ、剰さへ、それゆへに武林家の重器失たるは、此身に覚へぬ災禍なれども、今、言とくべき故もはべらず。是、運命の竭る期なるべし。賠話には義忠が是にて自殺をとげはべらん。上使には吾首を室町殿の実撿にそなへ、義忠が野心なき心を達したまはれかし」
と覚悟きはめし形勢に、内蔵之助あわただしく走りいで、「君侯しばらく」と推とどむ。身は白無垢に無紋の上下。死出の晴衣を刷ひ、右の手には願書をささ

げ、左には腹切の短刀を携へたり。内蔵之助、上使に対ひ、

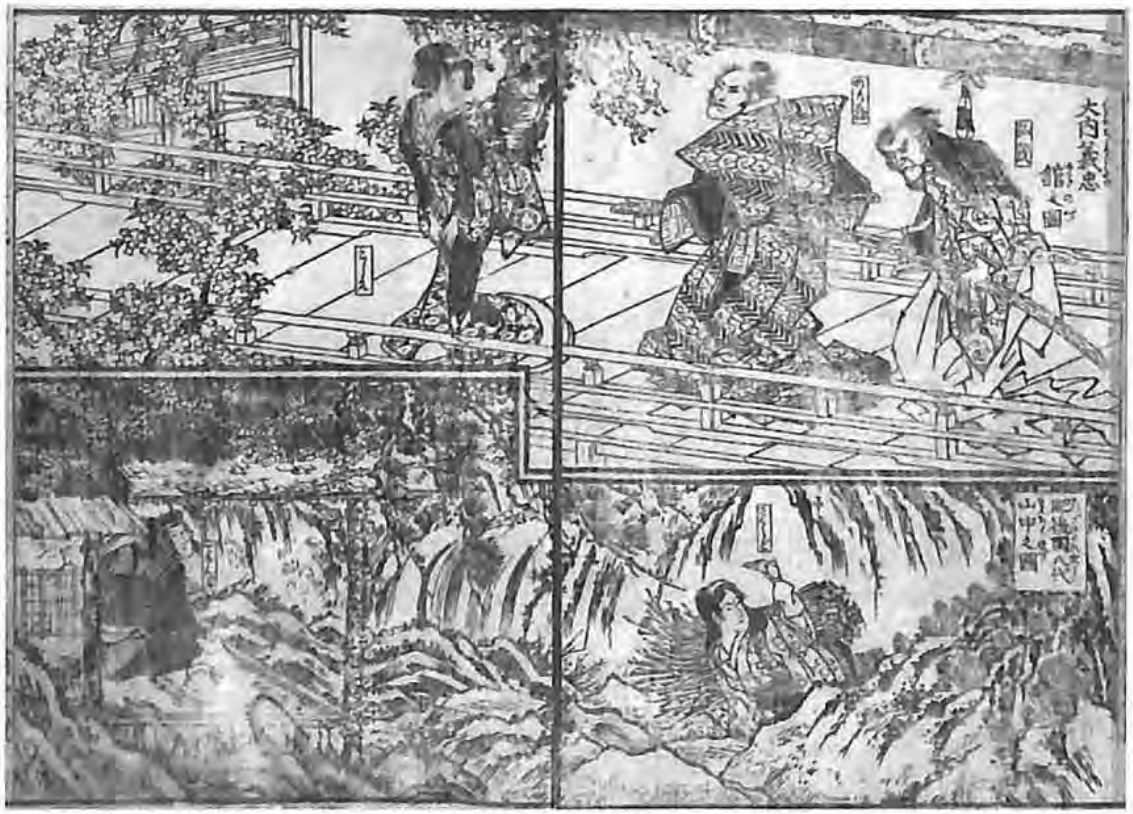
「重宝の失たるは館を預る愚臣が誤り。何とぞ曲者をからめとり、糾明を遂はべるうち、霎時の猶予。執権たる内蔵之助（挿絵3－③「大内義忠館之図」「肥後国八代山中之図」）景行、死を以て願ひ奉る。御上使のお情をもつて御前宜しく執成、ひとへに希ひ奉る」

と、願書をさし出せば、教勝、しぶしぶ受取て、有無のいらへもあらざれ共、内蔵之助は数回ことばをつくし憑むにぞ、上使も今は詮すべなく、

「願の趣、武林に啓上奉らん」

と答に、景行、いと嬉しげに恩を謝しつつ、義忠に別れを告、心徐に肌をしくつろげ、短刀ぬきもち、既に斯よと看たる時分、おつぎの間より声たかく、

「待た、頃臾（須臾）。室町殿の使者として、暗辺右馬之尉教勝、わざわざ茲に参着せり。速まりたまふな、方々」



（挿絵3－③）

と、紙門をしあけ入来る。義忠はじめ許多の家臣、たがひに面を見あはせつ、先だつて上使として暗辺右馬之尉きたり給ふに、亦もや同じ性名（姓名）を号て来る武士は、善か悪かは白刃の短刀、鞘にをさめつ内蔵之助、謹で出対ひ、上坐にぞ請じけるが、先に来りし上使の武士、たちまち面色を変ていふやう、

「何奴なれば吾性名（姓名）を号のり、上使と偽りここに来るや。你、いかなる弁舌をもつていひくろむるとも、吾、かく先に入こめば、最早その甲斐なきぞかし。早く此を立さらば、武士の情に命をたすけ得さすべし。隙どらば手は見せじ」

と居長高になつて罵れば、其尾にしたがひ典礼弘茂、

「さきに教勝、上使として入来ありしを知らざるか。家隷も連づ、ただ一個、上使などとは最いぶかし。当館の大事を看込、貯賂などの黄金を掠んとここに来れるものならん。此館をいづくと思ふや。山陽西海の探題職の館なるぞ。今些し小国に至りなば、欺りおふせる事もあらんに、思慮あさはかなる愚さよ」

と、苦りきつたる面色に、教勝はたと眤（睨）つけ、

「人面獣心の典礼弘茂。なんぢが悪計を隠さんと、いしくも宜言つるぞ。上使の打拐め、速に悪計を白状せよ。猶予せば、搦捕て鞫問にかけ、骨をひしぎて言すべし。かたがた由断（油断）いたされな」

と言尖どにいひ放せば、弘茂、胸にひしと的れど、爾あらぬていにて呵々と打わらひ、

「世の常言にいふごとく、盗賊白々地とやらん。吾慾心に眼くらみ、向ふも見ざる悪口雑言。さきなる上使を偽りとは、何をもつて何を照拠。返答によつて其坐はさらさじ」

と、佩刀に手をかけ詰かくる。教勝、さはがず懐中より服紗に包し小鋏を出し、

「是、看しれりや」

と、弘茂が眼前にさしつくる。此方は尚も心に徹し、胸とどろけど、邪智ふかき典礼弘茂、かしらを打奮、

「われ曾てをぼへなし。何をもつて其小鋏を上使の虚実の照拠と成や」

と胡盧に、

「いいや、爾はいわれそ、弘茂。吾、かかる孽もあらんかと京師を発し其日より、下僕を轎に乗をきて、後辺にしたがひ道中なすに、をもひきや、昨夜、福川の東岸にて筒音たかく響くとひとしく、轎子をどうど打抜、樹下陰より出る曲者、許多の家隷に落散し鎗、兵具まで〔う〕奪とらせ帰るを治定と見とどけしゆへ、『曲者よ』と声かけしに、手速く打たる手裏剣は你が紋を彫たる小鋏。あとをしたふて候ふに、放鹿が丘の館に入ずや。尚、此うへにも言訳ありや。爾る時は室町にしのび入しも你が一味の党ならめ。速に白状せよ。さなくば搦めて皇都に引ん」

とつめかくれば、弘茂、かへす言もなく、「はつ」とばかりに怖れいる。以前の上使も、『こはかなはじ。茲ぞ一生懸命』と、教勝めがけ斫かくる。透さず是をうけとどめ、提簡うたし抛つくれば、並居る武士かけよつて、高手小手に縛しめたり。のがれがたなき典礼弘茂、腰なる佩刀ぬくよりはやく、上使と打拐し家隷の頸をうちおとし、かへす佩刀を袖にまき、腹にがはと突立たり。悪人ながらも伯父の殿。義忠はじめ家隷等、「こはいかに」と駭けば、弘茂、これををししづめ、

「今は何をかつつむべき。吾、義忠が伯父たる身をもち、放鹿が丘の采地にあるを、邪なる心から足ことしらぬ情なさ、甥子に罪を蒙らせ、当家を横領なさんずと思ひそめしが悪事の首。家来煙三に命じ、当家につたはる蒼鹿の革を暗〔か〕に〔う〕奪とらせ、室町家の重宝たる麝の香炉を盗ませ、わざと照拠に蒼鹿の革を殿中にをとし置ば、義忠が自滅は必定と、籌策の浮漚や、あはれむべし、多々良の浜にて家隷はつひに人手にかかり、秘書の一巻まで失ひ、無念にをもひ益悪心、尚こりずまに邪智を惟し、上使の入来あると聴より疾く、『是、僥倖』と往還すじに家隷をしたがへ、曛黒がりの宵烏夜をしのぶ便と並木の陰、轎子めがけ打こむ鳥銃。あやまたず、擺擽せしゆへ、教勝どのを撃しとをもひ、調度、轎子のこらず奪ひ、面体

しられぬ家隷をば上使の貌に出扮せ、当館へ入来させ、情なくも義忠を自滅させんと計しこと、木陰に有て枝をたち、流れをくんで水上を乾にひとしき悪心を、天道いかでゆるしたまはん。計略の掌を返すがごとく、悉悉することなすこと齟齬こそ空おそろし。因果はめぐる小車の、われと心を善に帰し、先非を悔ての切腹なり。こはいささか先祖と甥義忠へのいひわけぞや。教勝どのには吾しらが頸、何とぞ携へ帰京あつて、宝の詮義、曲者の往去をたづぬる其あいだ、猶予の日延をおとりなし、宜しく願ひ奉る」

と、死ぬる今際の誠心に、教勝ほとんど感嘆し、

「悪につよきは善のたね。足下が今の一言は、是、人道の誠なり。かかる願ひの趣きを、教勝、いかで見棄べき。身に引うけて所望のとふり、御前よきにはからはん。心静かに成仏あれ」

と聴より弘茂、いと嬉しげに、身のくるしさも打忘れ、

「こはありがたし。かたじけなし。這上は心にかかる雲もなし」

と、佩刀を右に引まはせば、『苦痛させじ』と教勝は、後辺に立て刀ぬきもち、即地に頸を撃落しぬ。義忠、景行、あまたの良従、弘茂が夾よき最期の誠を感嘆し、しばし愁ひを催せり。時から昨夜、四面に逃たる教勝が従者等、遠近より此山口にあつまり来て、斯と告るに、僥倖と羈の調度も轎子ものこらずここに揃ひあれば、「倡、このままに帰洛せん」と、弘茂が頸を携へ、家隷をしたがへ威儀を正し、京師をさして火速つ。

ここに又、桂木照人清澄は、主命によつて肥藩におもむき、八代の山中にて不図も熊坂の小蝶が為に千仞の谷へ抛おとされ、爾のみならず義忠より預るところの名管をうしなひ、既に谷間に死すべきを、賤の婦が情によつて再び此世の人となり、其名をとへば、「桜子」とて、奇異にも世にやさしく痛手をいたわる誠心に、しばし此谷陰の廃家に全体の疵を養生しけるに、そも此賤が栖家といへるは、詹前（簷前）か

たぶき苔にむし、荒木の柱、菱にゆがみ、八重葎、扉を閉れど壁はかへつて破をちて、自ら月の光を招き、詹前（簷前）にしたたる村雨、松吹をくる嶺の嵐の余、音信ものとてなし。されど、照人もいつしかここに住なれて、侘しきことも苦にならず。桜子は寅酉に誠心を並（竭）し、薬をすすめ、糧をととのへ、介抱、些も怠らず、竟に全身清々しく、いと壮健になりたり。照人ははじめより人跡まれなる谷陰に嬋なる賤がありさま、不審をもへるに、其身のうへを索ぬるに、

「父もなく母もなく、深山の奥の孤子にて、ただ一木なる桜子」

とのみ、余にいらへの辞もなく、爾るにいつか照人も桜子が誠心につひ絆されて、解そむる春の氷にあらねども、二世を筧の水さへも洩しはせじと誓ひつつ、わりなき中となりしかば、賤が伏屋の片葺に一日、二日とをもひつつ送れる程に、月日は渓の流れの水より速く、其年も稍暮はてて、嶺の春日の長閑に、巌間のそこここに、残の雪も消がてに、鶯啼ば梅わらひ、霞たなびく四面山の春のけしきの融々なるに、照人は心つき、

『身の病労も怠れば、いつまで斯てあるべき』

と、小蝶が有処をたづぬれど、先だつて此地を去たれば、曾て其往去しれず。さればとて此ままに山口にかえり、主君にあふべき面なければ、

『一まづ此を羇立て、名笛を詮義しいだし、其のち在しことどもを微細に啓し、誤りを賠話にはしかず』

とて、桜子に如此々々の情由をつげ、

「名笛をとりかへし、再び山口に立かへり、もとの身となるならば、其時こそは改めて呼むかへ妻となすべし。それをたのみに身を完ふし、必らず待たまへ」

など夾七夾八いひ慰むるに、桜子も今更に先ものはなみだにて、最、余波はをしまるれど、止めん辞もあらざれば、「亦会ときを楽みに、朝夕わびしき嶺の雲、渓間の月をながめん」と言かけては、亦「よよ」となく涙にひたす袖の雨。わかれををしみ、葩毎に涙

の露のしたたりし、其桜木の哀れさの身をしる雨に想像、「これや、液雨の桜子」と、たがひに手をばとりかはし、尚も涙に眩けるが、『心弱くてかなふまじ』と、竭ぬ思ひを振切て、定めぬ羇におもむきぬ。

女熊阪朧夜草紙　巻之三　畢

女熊阪朧夜草紙　巻之四

摂都　暁鐘成　戯作幷画

第七套　世唱老夫婦　衆輯柳巷桜

「用ゆる則は鼠も虎となり、用ひざる則は虎も鼠となる」と、東方朔が虎鼠の論も宜なるかな。

偖も桂木照人清澄は、主家の大変は夢にだもしらず、名笛を失へば山口にも得かへらず、『恁ともして宝の往去、詮義せばや』と、此方彼方、いづくを的はあら磯をつたひ、険しき嶺をこへ、心の弓を播磨路の完栗（宍粟）の里は故郷なれば、『実の父母をも弔（訪）らひて、ともに手段を談はん』と、山陽道へをもむきつ、いそがぬ羇の日を重ね、完栗（宍粟）の里にいたり、稚心に覚へある父母の詹前（簷前）をたづぬるに、標の松は朽もやらず往古の面影にかはらざれども、栖人はいつか変りて看も聴もせぬ農夫なれば、照人はのぞみをうしなひ、此に立より父母の往去をたづぬるに、五年前に父も逝去、母のみ暮し有しかど、世の便著なさに再縁なし、今の夫の活業のため、室の津の廓に移りすみ坐せるよし、農夫が説話を聴よりも、些しは心安堵て、稍、四面八表の話をし、礼をなしつつ室の津にぞいたりける。

そも、此榛間（播磨）の国、室の津といへるは、西海通舟の湊にして、朝に千艘の出帆あれば、夕に千艘の入津ありて、山陽道第一の繁栄なり。山は三の面を裏（嚢）み、入江の濤、一方にくぐまり、蒼海まんまんとして百里の美景を観望し、渚によせし泊舟は池中に遊ぶがごとく、旅の客、濤の上に枕を安んじ、嶺

には樵夫、山児等、手斧をひびかし、岸には浮女が糸竹の音、囂し。

抑、此津の柳巷といへるは、俗に遊女の濫觴の地とよびて、娼家、青楼の結構、遊女の美麗、他のをよぶ所にあらず。先、東西に大門をかまへ、番人、ここを厳しく護り、遊女が出入をとがむ。一廓の内に四条の街あり。青楼、娼家、詹前（簷前）をならべ、昏にかよひ晨にかへる遊客、引もちぎらず。青楼臨の花魁、八文字をねり、妓院に往娼婦、木履をならし、戯節唱ふて携伴ゆく雛妓、借ふれてゆく妓院の婢女、ほうかぶりせし嫖客、店子妹を「奇し」と格子を覗く田舎客、恰も櫛の歯を引が如く、楼上に弾たつる三絃、時興小唱たかでうし、四面に散じ、笑ひを催す六頭子、うたひ妓の声、雲の外に喚び、夜を昼とも分たざる大繁昌の花街なり。

照人清澄は微とここに来りて、母親の今の栖居をたづぬるに、遼、花街の巷端に最もわびしき廃家なるが、今の夫の職と見へ、土瓶、あるひは焼鍋のたぐひを鋳懸なす風色にて、此目標を詹前（簷前）にかけたり。母は這家に有とはしれど、再縁なしたる家なれば、胡渇にも這入がたく、心をかねつ浮漂ど、入でかなはぬ事なれば、声密やかに案内す。「誰」と応答て母の小萩、外面に出て貌を看より、

「こはいかに。照人にてはあらざるや」

と、絶て久しき吾子の対面。手のまひ、脚の踏途をわすれ、心いそいそ雀踊をもひ、『何から先へ説話らんや』と、さも嬉しげなる形勢に、照人は身のあやまり説話んも面ぶせ、『いかがはせん』と猶予ど、いわで叶はぬ身の成行。詮方なければ、母にむかひ、索ね来りし縁故の端終を微細にかたれば、母は屢おどろき、霎時ことばもなかりしが、

「足下の父は早世たまへど、今の夫も托しき男気ある人なれば、此一条を明白に説話り、ともどもに商儀せば、詮義の便著もありなん」

と、力を添る真実の母の言に、照人も些しはこころ安堵つつ、頃臾（須臾）ここに身をよせつ、今の父にも

対面し、身の薄命を語りければ、最、信実たる男にて、世にたのもしく聴へつつ、ともに力を添にける。

しかるに、此父といへるは、首は西国辺の農民なるが、先頃の乱軍に村々郷々一片に馬の蹄にかけられ、或は一時に焼滅られ、故郷に栖ことあたはず、遼に逃のび、此榛間路（播磨路）に身をよせしが、田畑をもとむべき貯〔へ〕さへもあらざれば、さまざまと思慮を惟し、破たる土瓶、焼鍋のいかけなすを思ひつき、夫婦つれだち街にいで、「土瓶、焼鍋のいかけ、いかけ」と呼ひつつ、日毎に諸々を廻りしが、奇しき事を好人ごころ、漸に弘まり、終日手業もあまりがちなれば、一簾（一廉）の活業とはなれり。爾あるによて世の人毎に夫婦つれだち往来を活業の名をもていひふらせるぞ、一奇事といひつべし。されども家きはめて貧く、足はぬがちにくらしければ、照人も坐して喰ひ、臥て飲こと、つらくおもへば、此程より柳巷の中なる青楼町を看廻なす番人に備はれ、名も照七と更ためて、白昼は終日此一町に心をくばり、夜は終夜、火の元の用慎を厳にし、鉄棒を引、東西に巡り、僅のやとひ賃をとりて、辛き憂世を渡りぬ。是も一の手段にて、『花柳は人の入こみなれば、名笛の手がかりも、偖あらんか』と、手馴ざる業を寅酉なしけるは、不便にも又、殊勝なり。

ここに亦、一の奇異あり。そはいかなることぞといふに、近き頃より這青楼街の真中に、凡、其幹のまはり四間余にもおよぶべき桜の大樹、一夜のうちに生いでしが、花爛熳としていと広やかなる青楼の詹前（簷前）も葩にうづみて羞明、白雲につつむがごとし。是、いかんなる故ぞとは、神ならぬ身の誰あつてしるべき人もあらざれば、或は「天狗の所為なり」といひ、「木精の業」とも言ふらし、斯ばかりことならずとも物見高き世の人ごころ、殊更希代の珍事なれば、衆人、奇異のをもひをなし、四面に其風声高ければ、此葩を看んと群来る賓客、雲霞のごとく、当廓中の開発よりいまだ見も聞もせざる饒ひにて、夥なる花魁、天職の青楼入、さしかけの日傘、ところ狭まで

並ぶ分野、ことばにも言竭しがたく、其うへ、忘八なる初瀬屋が長のもとに花の戸といへる突立しの新粧あり。此契情、としはいまだ二九を過ずといへども、謌詠、絵、花挿、茶法、香道、糸竹の調はいふも更なり、しかも容顔美麗にして、葩を欺き月を嗤ふの貌あり。此新粧をまねかんと群くる客、また多く、つきだしの其日より寅酉客の絶間なく、青楼にいる街条は是をみんと立つどひ、広き街さへひしと詰り、桜の奇怪と花の戸の艶客（艶容）に、廓中の僥倖これに過ず。

一日、此花の戸のもとより雛妓をして彼照七に「会まくほし」と言こしければ、照七は何の心もつかず、いまだしらねども、此頃名うての新粧なれば、『恁なる用のありてや』と、いそがはしく初瀬屋にいたるに、「部屋にともなひ来よかし」といふに、引舟、禿等は「花魁さんの命ぞや。疾々楼上に来れよ」と、口さがなくも呼立られ、怖る怖るも照七は花の戸の粧室にいたるに、床違棚の荘厳、あたりを輝かし、机の上には和漢の書を積かさね、紙門屏風のたぐひ、悉

（挿絵４－①）

悉このみと看て桜を画けり。照七は心ときめき、手をつかへて扣へしが、此時、花の戸は机にむかひ書を認めいたりしが、雛妓が斯と告るより、最うれしげなる面色しつ、引舟、禿を遠離つ、こなたに来り、照七が身辺によるを看れば、誰あらんや、是便ち肥藩の山中にて別れたる桜子にてぞありければ、不慮ざる対面に、「こは眷恋」とばかりにて、一時間は言もなかりしが、花の戸は（挿絵４－①「せきかへす袖の下水下にのみむせぶ思ひのやる方ぞなき」）照七がやつやつしき風俗を見るに悲しさ胸せまり、労しさと嬉しさに

先だつものは涙なり。照七は何をもひけん、撞と立て、いそがはしく楼上より下んとす。花の戸は不暁得どすがりつき、

「こは、何ゆへ」

と止めつつ、

「八代の山中にてあかぬ別れをせしのちは、文のたよりも貌も見ず、微をんみの往去をもとめ、けふの対面をたのしみて、会ばどふして斯而と思ふ心に引かへて、いかなることの坐してや、爾はなしたまふぞや。積る説話もあるものを、嬉しい詞もかはし玉はず、此を去たまふには縁故こそあらん。聴せてたべ。賤妾にあやまり有もせば、言解よしもはべらん」

と涙ながらにかきくどくに、照人は下に居つ、

「今更いふにはあらねども、先頃、八代の山中にて、をんみなくんば亡人の員に入べき此照人。疵を養生、痛手の介抱、礼は言に竭されじ。其信心に絆されて、わりなき妹背の縁にしを結び、二世まで契ひし中ならずや。斯までふかく言かはし、『主家に帰参の日をまたば、更め迎へとらんぞ』といひし詞も待もせで、君傾城の身となるは、そは誰ためぞ。父母も世に在さざる身ならずや。何ゆへかかる苦界の憂身とはなりつるや。他男の為なるか。亦、戯れし心より、一夜妻とはなりつるか。吾は宝をとりかへし、身の汚名をすすがんと夜半の枕も安くはせじ。をんみは夫に引かへて綾や錦を身にまとひ、夜は錦繡の衾にふし、異夫に見へては、月に酔、花にうかれ、世のたはれ女とよばるるを誉とばし思へるや。看さげ果たる心よ」

と、怒の涙、袖ひたせば、花の戸ははじめより泣しづみて左袖右袖のいらへもなさで有けるが、稍あつて面を擡、

「縁故を告ざれば、其うらみは所理なり。さりながら、賤妾、かくなり果しは他男の為にもあらず。好みていかで川竹の憂には沈みはべらんや。微細に告す。一応ききてたべよ」

と、立あがり、四面かがやく簞笥のうちより服紗包を携出し、

「是、看てたべ」
とさし出すを、照人、とつてひらきみれば、是なん許多の黄金なり。『こは何ゆへ』と不審に、花の戸は涙をはらひ、
「おんみと二世の縁にしを結び、君が一夜の情には妾が百歳の命にも換べきほどに最愛さの、想ふにまかせぬ宝の詮義。なみだながら別れしかど、余りこころの遺方（遺方）なさ、跡を慕ふてここかしこ、索呻ひはべりしが、不図もこの柳巷に憂賤男の其日すぎと聴より心もこころならず、『可弱き体なれば、もしやそも、病労の発りやせん。嘸な悒憤をぼされん』と思へば、とやせん、角やせん。且には、『父母の御身も足はぬがちなり』と聴ばきくほどかなしさの弥増ばかり詮方なく、拙かなる性なれど、君契情に身をうりて些なりとも金をこしらへ、此艱難を援けたく思へるまま、過にし日、初瀬屋の亭主にわたり、苦界の身とはなりはべり。疾よりここに坐すこと、しるといへども、此条を聴たまひなば、恁にしてゆるしたまはん。
其時は憂に患をば増なんと、身価金を請とるまでは
と、今日が日まで会たさをこらへこらへてはべりしぞ」
と語るを聴て照人も、『偖は』と喫一驚、胸塞り、涙に眩て居たりしが、稍あつて涙をはらひ、
「かかる情由とはしらずして、一朝のいかりに前後を忘却れ、不覚にも言罵しこそ、今更わびるに面なし」
と、夾七夾八ことばを竭し、其こころざしをよろこびつ、過こしかたのことどもを霎時たがひに語りあひぬ。
斯て後、花の戸は身価を照人にわたし、夫の憂を援けける。されども照人は、花の戸が心をこめし黄金なれば、化なることには些も出さず、其身の冥加、ふたつには宝の詮義の為なりと、初めにかはらず番人に傭はれ、日毎に花街をまはりしとなん。
さて、此頃は青楼毎に唱ひ舞ざる所もなく、夜ひるわかぬ糸竹の音嚣きそのなかに、分て花井筒屋とよ

べる青楼は、此柳巷の第一にして、余に並ぶるかたもなし。

此に過にし夕より、花の戸が色香になづみ、還りを忘れし居つづけの、「春」と綽名の大尽あり。去武家がたの家臣のよし、花の戸はじめ許多の唱妓、いつも贔屓の気にいりは梅とよびなす仲居にて、よく勾配の利婦。花街で名うての通り者。飲や唱へと有頂天、前後もわかぬ踊声花。今日の趣向は名にしをふ桜の下に床すへさせ、花魁、娼妓、花車、中居、とりひろげたる酒池肉林。汁も鱠も桜木の葩にあへたるごとくにて、芳野、泊瀬（初瀬）もなかなかに及ばぬ光景。これや此、歓喜園の楽みもかくやと思ふばかりなり。酒も四面に行わたり、屡々興に入をりしも、樵夫と思しくて、田舎木綿の腕細の布子に葛をもて織し袖なし外袍を着し、絞衍をはき、蓆帽を腰にはせ、巍しき山佩刀をぼつこみ、大なる鈇を携へたる血気の壮男、つかつかと出来り、衆人に言もかけず、桜の下に立より、幹をめがけて大斧を撃こまんとす。許多の中居等、むらがりより、「こは、何事」とをしとどめ、

「足下、いかなる人なれば、貴客の酒宴したまふ其ほとりとも憚からず、何等のことを做にや」

と憶ることばに、這俣は振上たる大斧をとどめ、呵々と打わらひ、

「吾、この桜を伐倒さんため、遼ここに来りし」

と答ふるに、とどめし中居等はいふも更なり、大尽、花魁、唱女もともにあきれて興をさまし、酒宴をとどめて扣へたり。中居等、なをも不審、

「そもや恁なる情由ありて、今を穠の柳巷の桜を伐倒さんとは言ふぞ」

と、些いきまき索ぬれば、那男は猶数回うちわらひ、

「花街の葩とは聴苦し。そは往古より植あるか、亦は近曾、金にかへ需しものの言ことなり。吾は西溟肥藩、八代の山中を預る凩の風六とよばるる樵夫なり。しかるに、谷間の時雨の桜を一夜のあいだに蔓こつた根ながら引て往去しれず。『何でも鼻の高ひ衆の所為であろう』と、山児や樵夫仲間が打よつて、寅酉

の大商儀。このごろ聴ば榛間路の室の花街に仰山な桜が一夜に植つたとの風声を聴て、逸散に宙をかけつて来た風六、抜ては往れぬ大樹ゆへ、幹も枝も伐こなし、船に積でもつて去ねば、山主への言わけなし」

と、亦立よつて振上るを、花街ではききの仲居の阿梅、いそがはしく蒐よつて、大斧の柄をしつかと止め、

「前後より微細の説話に就地不審は晴はべり。かかる情由とはいざしらず、吾物顔にたのしむは、実、此方に罪ありて、足下の詞は所理なり。去ながら此廓とても強ちに好みて植し桜にもあらず。不測に自然と植りし桜。さすれば花街の奪ひしにも非らず。其うへ、かかる大樹には、かならず木精もあるものぞ。梓樹を伐、古木を倒し、怪異にあへるよしを漢土の説話〔に〕も聴り。伐でかなわぬ事ならずば、価をさだめて需めたし。此ことはいかがぞ」

と、理非をわけたる阿梅がことば。有繋は柳巷の通りもの。聴人毎に感嗷せり。風六、しばし小頸を傾け、稍あつてはたと掌をうち、

「恁にも是は所理なり。鹿を追ふ猟師等は山を見ずとかいふ常言。ただ一図に山主へ這身の言訳なさんため、伐倒さんと疾りしが、今、をんみの言にて心づきたり。山預るも預けるも、桜（挿絵4－②）で柳巷のもふけるも、渾、算盤の珠づくなれば、価金さへ渡されなば、山主へ引合て、如此如此の縁故をかたらば、木精もあるべき大木を伐が道でもなき事なれば、それを否ともあらがふまじ」

と、些し面を柔らぐるに、阿梅は猶も辞をつくし、

「そも恁程の価ぞや」

と索ねに、風六、少頃手をくみ胸のうちにて置算盤のつぶやきつつも、稍あつていふ容、

「斯なつては此方のつけめ。ゆすりたひ程、淘る代物。されど、美麗に咲たものを汰らば、葩も散やせん。まけて桜も梅が枝に比べて価三百両」

と、戯言まじりに言ければ、後へは引ぬ阿梅が気質。

「いかにも価の三百金、賤妾が手より渡しはべらん」

（挿絵４－②）

と、傍辺なる仲居に命じ、花井筒屋にかくと告るに、即地に小判三百両、みみをそろへて携来るに、阿梅はこれを携上つ、

「倡、更めて請とられよ」

と、封をし切てさし出せば、風六は莞爾と片腮に笑を福徳の三百金を更めて受とりつ、

「是から桜はをんみのまま」

と聴に、阿梅も、大尽はじめ許多並居る婦ばらも、広き地方に出し心地。

「おんみ、ここに居たまはずば、廓の葩は就地微塵。桜の為には命の親」

と磅立て雀踊べり。花の戸は初より言をもいわず打凋れ、面をうなだれ居たりしが、微、面をもたげつつ、

「桜の心になるならば、嘸な嬉しく思ふらめ」と「命の親の阿梅のぬし」

と、笑を含める面色に、

「それ、花魁子の気色が直つた。其祝ひと此桜に怪我

のなかつた喜悦に、酒はじめん」
と、中居等がかしましきほど口々に戯言いひつ席上をめいらさせじと饗応て、亦も酒宴をもよほしぬ。
「中なをりやら、近付の盃せん」
と春大尽、
「一ツ飲やれ」
と、風六に大盞をあたふれば、風六は大に雀踊、
「かく美しく納まる上は、祝ひに酒をいただかん」
と、貌もかくるる大盞、てうど受つつ飲ほせば、
「是は奇麗」
とつづけさま、阿梅が合に愛をそへ、数盞の酒を傾むくるに、春大尽も興に入、
「気快かれが行状かな。先、某が肴せん。こは古めかしき事なれど、此桜木の因縁を聴およびしまま説話らん」
ときくより、唱妓、仲居ども、
「こりや、気のかはつた思慮。怕めてをもしろかりそふな。疾々、聴せたまへや」
と昇し立れば、春大尽は酔にちろつく瞳子をすへ、扇を携へ膝立なほし、
「そも、この桜の因縁は語もきくも涙なり。液雨とよぶは後の名にて、初めは暁桜とて、世に奇しき大樹なるが、葩はたぐひもなき大鈴。色香も余木の花にこへ、麗しきこと言に絶たり。爾によつて、肥藩八代の城主たる菊地左馬之頭忠頼、ふかくも寵愛しみ、根にこへを入、塵を払はせ、寅酉養育に怠らざりしが、去ぬる応永のはじめつかた、忠頼、西溟に官軍の旗を挙しによて、大内義廉、対軍として八代に責よする。其勢、潮の涌にひとしく、有繋の鞠地も大軍に責立られて許多の忠臣勇士、残らず一場の枕を並べ、忠頼にも既に自殺し果おわんぬ。其時、非情の桜木も、寵愛うけし忠頼が最期を悲しみ、爛熟し葩毎より涙のごとく露滴りて樹下を浸す分野、霙のごとくなりしとて、世人、液雨の桜と号そめ、今に爾はよべるとぞ、精き人の説話に、吾、かねて聴をよべり。花、ものいわねど、別れを惜み涙の露の滴りしは、最奇異にもあ

はれなる希代の珍事にあらずや」
と、さも哀れげに説話れば、花の戸はじめ唱妓等も、心悲しき陣没のはなしに席もしらけたり。
阿梅は始終さしうつむき、此説話を聴居しが、怒りを含る面色にて、右の手に携盞を思はず磴と打おとしぬ。阿梅ははつと心付、『悟られまじ』とわらひに紛らし、
「軍談のおもしろさに、吾をわすれて聴入つ、不覚のことをしはべりし」
と、傍を拭ふ小菊紙、しめりかへつて風六も、
「さてさて、哀れな説話に鬼の眼にも涙とやら。程よく酔た酒の気も逃て往し」
と謐けば、春大尽も眼を推拭ひ、
「実、所理なり。ものがたる吾も涙を催して、你にひとしく酔を醒せり。倡、席をかへ、今一献のみ直さん。風六とやらんにも供に来よ」
とて、立あがれば、「こは宜趣向」と、一様に前後をかこふ手轡、ざざめかしてぞ順ひゆく。花の戸はただひとり、癪おこりし面色にて、「後より青楼にいたらん」と独り残りてさしうつむき、こころも済ぬありさまなりき。

第八套　闘忠義双刃　代親子桜操

「世の中を思ひつづけて見る時は散こそ花の盛りなりけれ」と、家隆の詠じ給ひつる古歌のこころも今ここに思ひ合せて、花の戸が桜の下にただひとり、雨になやめる海棠のさまとや見なん、並べたる床几にこしを襠かけの四面まばゆき綾錦、かほる蘭花に打群て、西に漂ひ東に通ふ衆人も、しばし彷徨、目をとめて、胸ときめかさぬ個もなし。何かはしらず、花の戸は阿梅が方を見をくりて伏拝てぞ居たりける。
ここに照人清澄は、桜の生し其日より此桜木の花守となり、猥に花を手折もの、或は葩を散せる党を厳く制し、又、朝夕に根に水をかけ、塵を払へる役をなし、夜毎日毎に看まはりて、身には桜の花を染し短衣を着せり。こはかかる役を做者、約莫廿余個あり

て、俗に是を桜番と称へ、渾一様の出扮なるが、最爽なる品流なり。

頃臾（須臾）群集のとだへたる透をうかがひ、照人は人目しのびて花の戸が腰打かけし身辺により、

「恁なればにや、其容に心の清ぬ面色をしたまふぞや。心地あしくば此頃の風に的らば猶あしし」

と心つくるに、花の戸は漸に頸を擡、

「さのみ心を労ひたまひそ。心地あしくも侍らねど、此程より花井筒の居つづけ客にむかへられ、今もいまとて客の過こしかたの説話に、わすれて年を経しものを、又、往古の思われて癪の発りはべりし」

といひつつ、互により添て密々語るをりからに、中居の梅は大尽を花井筒屋の楼上にともなひ行、前刻に花魁花の戸が心気よからず看たれば、『いかがあらん』と気にかけつ、風色をとはんと何気なくつかつかと出来り、

「花魁子はまだここに坐すや。心地はいかにぞ」

と索ぬる声に、はつと一契驚、花の戸は照人を後辺にかくし、さあらぬ面色。

「前程には癪に苦しみしかど、今、微に治りはべり。早晩もかはらぬ厚志、いたわり給はる恩情をいつの世にかは報ぜん」

と言に、阿梅は打けして、

「あの花魁子の些ばかりに礼を言まうことやはある。婦はたがひの事ぞかし。別て苦界の浮ふしは余見によふて意の苦しさ。悪客を摩つて去し、好客つめつて止め、愁気ざしきの強酌も受ねばならぬ柳巷の風。癪気の発るも所理なり。随分ともに身を労はり、病労の発らぬよふ做たまへよ」

と、信実て言慰むれば、花の戸は、其誠心の嬉しさに不覚に涙さしぐみて、屢々恩を謝しいたり。

這時、照人清澄は何心なく後辺よりそつと覗けば、中居の梅もたがひに見会す面とかほ。まがふ方なく照人が日来たづぬる小蝶なれば、何かはもつて猶予べき、飛で出つつ声をいからし、

「偖は你、過つる頃、八代の山中にて名笛を奪ひし

賊婦ならずや」
と声かけられて、些しもさはがず、
「爾いふ你は、其時に千仞の谷に抛零せし舞々の青額なるか。就地に死したりしと思ひしに、世にながらへてありつるよし、属下の党等が告たれども、周防に越るに心せかれ、其ままに棄置しが你の僥倖。今、更ためて這世のいとま取せてくれん」
と罵しれば、照人、はやく桜木の根元に隠せし覚への佩刀、すらりと抜もち、
「你が為に全体をくだき、既に命も終るべきを、這婦に助られ、魂、吾にかへれども、名笛を失ひたれば館にかへることあたはず。遠近に漂ひて、かかる賤しき身となるも、再び宝をとりかへさん為。神仏いまだ棄たまはず、不図も還会しは優曇華の開くる時節。もはや脱れぬ鞠地の残党。すみやかに名笛をわたし、頸さしのべよ」
と詰かくれば、小蝶は些も噪ばこそ、
「こは径廷しき言ごとや。死損なひの楽人め。過つる憂苦を早忘れ、出るままの広言は耳に入るも傍痛。いで、此世のいとまとらせん」
と、隠しもつたる懐剣ぬきもち、丁々々と破むすぶ。花の戸ははじめより、『悲しき事の発りし』と、心も心ならざれど、取支んにも白刃と白刃。「あれよ、あれよ」と言ばかり、電光稲妻、鋒より火花をちらして戦かへば、心もとなき雲踏さに、此方をとめつ、彼方を拄へ、屢、供億をりしもあれ、
「同胞ともに過失せそ。少頃まてよ」
と声をかけ、左右より立出る老人の夫婦あり。三個もろとも不審、『何者なる』と此方を看れば、豈はからん、是便ち、土瓶いかけの夫婦なり。小蝶は一目みるよりも大に一契驚、老女の方は見しらねど、壱個は実の父にして、菜葉村なる蝶六なれば、斫むすんだる鋒もしばしとどめて猶予つ、
「こは父公にて坐するか。たへて久しき対面に積る説話も多なれど、事急なれば赦してたべ。今、同胞と宣ひしいはれは恁に」

と索れば、蝶六は眼を緊渋、小蝶が傍にどつかと坐し、

「思ひ出すも涙ながら、先年、鞠地の落城に、おんみの生死を問ふにこそ、遠近の村々まで対軍のために焼亡され、故郷の栖居もなりがたく、此彼に呻ひ、辛ふじて此播磨路に身をよせ頃臾（須臾）月日を送るうち、郷の人等が媒介して呼迎へたる妻子は此小萩。をんみの為には今の母。しかるところに、過つる頃、妻子がいにしへの実の児なりと索ね来て、たがひに名乗あひたりしが、風色を聴ば宝の詮義。年こそ老の暮なれど、『天晴、足下に力をそへ、宝の笛をとりかへし、帰参をさせて見せんず』と、怨敵を吾児としらばこそ、同じ柳巷に有てさへ、今日が日までも知ざれば、『何卒宝の手がかりも』と、夫婦つれ立、活業に街にいでては、『此事の首となることもや』と、心を砕き沈吟をこらし、片時おこたることもなく、しばしば尋求むれども、それぞと似たることもなく、今日も空しく帰るさに、来かかりて風色を聴ば、敵といふは実の女児。ねらふは義理ある妻子の仮子。なんと眺めていらるべき。互に無理とはおもはねど、両方が斫ても斫られても、親の嘆きはいかならん。余に手段はなきことか」

と、涙ながらに説話る。こなたは義理の母小萩、涙に口隠声しつつ、

「予て夫の説話にて、おんみのことをば聴つるゆへ、平生々々恋しく思ひしに、始めて会て此形勢。なさぬ中とて阻はあらじ。照人とても同じことぞや。同胞どちが斫むすぶ、白刃と白刃を親の身で何と眺めていらるべき。（挿絵4－③）宜沈吟はなきことか」

と、涙ながら双方を止めるぞ、実、所理なり。二個は血気の若者ながら、互ひに止る親々の歎きの言に伏しつつ、しばし浮漚居たりしかど、照人は名笛を取かへさずば一生埋れ木。養父の家の汚名なれば、見すごさん心もなく、小蝶も怨敵の重宝ををめをめ渡すやうあらねば、取捨にも勝負をば決せんより余、詮方なく、

「其命を背にあらねど、勝負なさでは果ざること。ゆ

（挿絵４－③）

るしたまへ」

と言つつも、亦、立かかる双方を、父と母とが攀りつき、微、佩刀もぎとりて、夫婦もろとも是をもて自害なさんず形勢に、双子はひとしく一契驚て、

「こは何ゆへ」

と、照人は蝶六が佩刀もつ手を治定と止め、小蝶は小萩が手をとらへ、互ひにとどむる義理と義理。

「あまりのことに心ばし、狂ひたまひしことなるか。何ゆへかかる覚悟ぞや」

ととどむる後辺に、花の戸が前刻よりなんとせん方も涙に眩てふし沈む。老の夫婦は稍しばし、はぶり落る涙をはらひ、

「何で死とは愚なり。前刻よりとどめて言ごとく、刃を争ふ一個は女児、一個は義理ある躬。どちらが撃れ斫れても、中に立たる親の身が何と見すてて居られんや。逆ごとに会んより、先へ黄泉に旅立て、看目の憂を援かる自害」

とかたれば、小萩も諸ともに、

「ヲヲ、それそれ。どちらをどふと眼を明て看もくるしき修羅のたたかひ。悲しいことのないうちに、一寸なりと前立て、憂愁気目を看ぬ覚悟。放して死してたまはれよ。嚮へ死せ」

と、父母がとどむる刃をあらそふ形勢。後辺に泣居る花の戸が、何思ひけん、撞とよりて、二個が拄へし夫婦の白刃、とるよと見へしが、両刀もろとも咽喉にがばと突立たり。不慮花の戸が自害に、四個は仰天し、

「こは、何故ぞ。何故ぞ」

と、俱に手負をいたはれば、花の戸、苦しき息をつぎ、

「縁故を啓さねば、不審たまふは所理なり。慙かしながら吾身のうへ、啓上る一条、はばかりながら聴てたべ。照人ぬしも必らずともに愛相をつかしたまはるな」

と、煩悶さをこらへつつ、

「そも、賤妾はかかる身と仮に貌を窶ども、素より貴き人間ならず。予々しろしめされたる、八代の山中に幾許の年を重ねたる液雨の桜の木精なり」

と聴より四個はもろともに面を看あわせ一契驚つ、

「そは何ゆへに桜木の木精にてありながら、斯はあらわれ来りしぞ」

と小蝶がたづねに、眼を睜ひらき、

「問れて今さら慙かしながら、忝なくも八代の城主とあをぐ左馬之頭忠頼公の寵愛うけ、難面樵夫、山児の斧の憂をも脱れて、朝夕樹陰の塵までも払ひたまひし大恩は忘るる隙もなさけなや、不慮ず館の滅亡。忠頼公にも御生害と聴かなしさはいかばかり。木石、心なしとは世にいへど、などか哀れを知ざらん。主君の別れを惜みつる涙の雨の滴りて、樹下を浸せしゆへ、霙の桜と世の人に称れはすれど、八代落城の厥后は、たれとふ人もなかなかに、深山がくれの埋木と世を慙く暮せしが、過にし年の晩春のはじめ、思ひもよらず高嶺より躅て落る旅客の賤しからざる臭貌と、看れば看るほど雲上き男。花には嫌ふ恋風の、ぞつと

する程最愛さのまさるが色の初桜。痛手をいたはる其うちに、山賊どもと思しき壮男、照人ぬしを四面より固みて危ふく見へつるゆへ、年経る木精の通力にて花の吹雪に敵をくらまし、照人ぬしを匿ひて、わびしき谷の廃家に疵を養生、痛手の介抱、情をかけて遣方（遣方）なき心のたけを打あかし、いつしかわりなき中となり、結ぶ妹背の縁さだめ。二世も三世もかはらじと思ふにまかせぬ宝の詮義。ながき別れの悲しさに、後をしたふて此柳巷へ飛梅ならぬ桜木の通力をもて一夜の中に此に生じて、人々の疑ひ受るも渾恋ゆへ、柳巷の桜と唱れて這身は愁気川竹の流れの憂に身を沈め、最愛夫の辛苦を援け、ともに宝の往去をたづね、あはれ夫を素の身に做まいらせたく思ふのみ、寅酉心を砕きしが、同じ設庁の酒宴に付会ながら阿梅のぬしを索ぬる敵と露しらず、殊更、嚮にも樵夫に伐倒さるべき所をば、許多の黄金に換たまひて、危ふき命をすくはれつ、今、礑きけば大恩の菊地の家の大忠臣。きけば聴ほど重なる恩義。怨敵とねらふは可愛ひ夫。義理ある老の親々の今の歎きのおはなしを聴につけては悲しさは八重九重にしがらむ縁。死ぬると言ふ御両親のお身がはりやら、且には賤しき非情の身をもつて、貴き人に交りし、其罪科の報ひの刃。死ぬる心を不便とおぼし、此場の勝負を待てたべ。かく両公の白刃にて賤妾が咽喉を貫けば、互ひに勝負をとげしと思ひ、願ひを叶へてたべかし」

と、深手の苦痛を堪しのび、憑むこころの哀れさを想像てはなかなかに有繋の小蝶も照人も涙に眩ていたりける。稍あつて小蝶、なみだを推拭ひ、

「聴ば聴ほど最愛や。非情の樹とは誰いひそめし。人もをよばぬ厚志、いかでか無下に做べきぞ。桂木照人清澄は、ただ一刀に撃たれば、似たる男のあればとて、なにしに再び撃べきぞ」

と言つつも、懐中なる名笛をとり出し、

「其志を感心のあまりに、をんみが黄泉の旅だちの餞別に宛るぞ」

とて、名笛を手負にしかと渡しければ、桜子は数回

をしいただき、をしいただき、
「数ならぬ苟き身を不便とをぼし、名笛を黄泉の土産にたまはるは、有難しとも嬉しとも言につきぬ大恩人。千部万部の経陀羅尼、千僧読経の供養にも遼にまさる厚情。今ぞ所望はかなひし」
と、名笛を照人にわたせば、是ををし頂き、感涙、袖をひたしつつ、桜子が心根を想像、名笛を雄手にささげ、
「敵小蝶を撃取て、名笛ふたたび手に帰れば、余に遺恨の何かあるべき。心おきなく成仏せよ」
と聴に桜子、うれしげに、
「死る今際の勧喜は何かは是に勝るべき」
と、苦痛いとわぬ誠心に、老の夫婦は正体なく、手負に攀り、よよと泣。
「おんみが命を棄しゆへ、親子四個が身も恙なく、主家へ忠も夫婦の義も、二個の児等が孝行も、就地をさまる此場の時宜。とはいふものの、人間にあらぬ木精のかくまでに世上の義理をしりつるか」
と思へば最胸逼り、尚も涙に昏ちかき、時分ひびく螺鉦太鼓。小蝶は佶と四面を看暁、
「はて不審や。不暁得」
と、いまだ言も終らぬ所へ、許多中居と貌を窶せし小蝶が属下の婦ばら、遽しく出来り、
「魁首、大事が発りしぞや。前刻に楼上に戯ぶれ居し春大尽と称つるは、大内の良臣氷室景行。また、山児の風六といひしも同じき家隷の入相権平なるよし。桜のはなしにをんみを怒らせ、此方の術を見あらはす籌策にて有つるよしにて、花井筒屋の裏口より抜出て住去しれず。柳巷の四面は十重廿重に夥兵をもつて捕囲めり。准備あつて一まづここを落たまへ」
と、佩刀、小具足たづさへ来り、すすめて身をば固めさするに、小蝶は准備をなしつつも、
「偖は渠等両個は敵の間者にて有しよな。傭人ならずとはじめより推察せしに違はざりし。仮令八方を取囲むとも、何条おそるるに足んや」
と、体をば固むるをりしもあれ、花街になれたる桜番

の血気の若党を前にたて、許多の夥兵出来り、「夫、脱すな」と声をかけ、稲麻竹葦（稲麻竹葦）にとりかこむ。剛気の小蝶、こととともせず、的るを僥倖、取ては抛、摑んではほる人礫。其余、属下の婦等、破立追たて飛鳥のごとく此を専途とたたかふたり。されども四面によせくる夥兵、恰も潮の涌にひとしく、有繋に猛き小蝶主従、阿修羅王のあれたる如く徒首になつて戦へども、多勢に無勢の違ひあれば、老の夫婦も屡々供億、大内の対兵と聴うへは照人も加勢ならず、『恁はせん』と浮瀛ぬ。桜子、苦しき声を上、

「鞠地の御家に恩をうけし桜が味方の其験。いづれもさらば」

と、突立し咽喉の白刃をくるしげに抜ばたばしる鮮血の紅藍、いろます春の熏昏や、日没つぐる山寺の鐘殷々と響とひとしく、這桜木の名にをふ液雨、一時に降出せば、風さへつよく吹競ひ、爛熟たる花一片に散す時雨や、山風の翻りつつ白妙にかきくらし降花の雪。方八丁の大廓の内外もろとも白雲に埋むがごとくなりしかば、四面を囲む夥兵等も前後左右の見へざれば、ただ忙然と呆れはて、恰も酔るがごとくなり。

女熊阪朧夜草紙　巻之四　畢

女熊阪朧夜草紙　巻之五

摂都　暁鐘成　戯作並ニ画

第九套　一時鳴嶺　履　相図輯　属　兵却説。熊阪小蝶は大内家を滅さんと蒼鹿の皮をもて室町の殿中にしのび入、履の香炉をうばひ、既に籌策、十が九仕負せ、『大望成就遠からず』と雀踊し甲斐なく、多々良典礼、自殺をとげ、暗辺教勝、京師にかえり、曲者詮義の其あいだ、猶予の日延を願ひしかば、武将義持朝臣、聴しめし、此願ひ叶ひしかば、大内家には差的りたる難を脱れ、曲者の詮義　厳なれば、石見国鷹爪山に栖ことあたはず、其頃即地に

貌をかへ、許多の属下の男女とも渾旅客の風俗に出扮、榛間の国に立こへ、峰相山鶏足寺の山内なる五重の大塔に身をひそめ、菊稚君には両三個の属下を属て傅かせ、其余許多の属下等はここかしこに分ち、商人、職個の儔ひに身を窶させ、善悪ともに相図の狼煙をあぐる時は一時に馳輯るべき術をなしをき、其身は婦の属下をしたがへ、室の津の柳巷に入、花井筒屋の中居となり、時をうかがひ居たりしが［是までの緒は三、四の巻に著はすべきところなれども、事しげくしてのぶるにいとまなく、よて茲にやふやく著せり。言句の前後にうたがひまどふことなかれ］、かへつて大内の籌策に堕入、閲をあつむる寸簡もなく、最も危ふく看たるを、桜の木精の通力にて四面をかこみし夥兵等を眩ます花の雪霙風に前後をわかぬを僥倖に、峰相山に立かへり、深くしのびて寅酉に軍慮怠ることもなし。

そも、此峰相山鶏足寺といへるは、西播第一の大伽藍にして、仏殿、法堂、庫裏、山門、鐘楼、方丈、輪蔵なんど都て七十余宇の寮舎、八十余間の廊下にいたるまで、悉悉良材をもつて建つらね、詹前（簷前）には金銀を鏤め、雲を貫く五重の大塔、魏々として衆の眼をおどろかせり。

小蝶は此大塔の内にしのび、菊稚君を守護なしぬ。しかるに、春たち、夏も去、秋も中旬になりしかば、一夜、小蝶は秋夕の寂寞さに、不覚にもの悲しくて寝もやらず、倩々過にし往を（挿絵5－①）思ひつづけ、「秋夜長し。夜長うして眠ことなければ、天も明ず。耿々たる残んの灯、壁にそむける影、蕭々たる暗雨、窓を打声」と、白居易が作れる詩の心をも想ひあはされて、長夜をほとんど明しかね、大塔の高欄に身をよせかけて、煙箭たづさへのむ淡波姑。煙、輪をふき夕霧にまじへて最も黎明四面をば少頃ながめて居たりしが、此時、鞠稚君の臥たまふ傍辺に、先年奪ひし麝の香炉を卓の上に荘れるが、恁なることにや、忽然と音を発することしきりなりしかば、嶮峰外嶺の草に臥、かづも限らぬ麝の、一犬虚に

（挿絵５－①）

吠、万犬の実に伝ふる風にて、一時に声を発しつつ、嵩きまで啼さけぶに、小蝶は四面に佶と眼をつけ、

「あら不審や。不暁得。われ、かねて聴をよぶ。此麝の香炉の徳には、所持なすものの身の上に凶事ある時は自ら声を発する名器となん。もしや、主君か吾身の上に孽来る捌（標）しなるか。あな、忌しき分野よ」

と独言やく塔の下、石壇に腰うちかけ、弓杖つきつつ瞬む猟夫。葛の藟をもて織し、あらき猟衣を身に着し、蓆脚伴に脚をかため、苧屑頭巾を腰にはせたるが、四面に屡鳴鹿の音に眠りをさまし、耳を欹て、

「総て鹿は多淫にして、牡、夜鳴て牝を喚ぶ。秋の夜、最しきりなり。といへども斯一面に鳴立るは平事ならず。不暁得」

と眼をくばり、佶と看あぐる塔の上。時から嶺よりさし出る月の光に、上よりも小蝶は下を看をろせば、彼猟夫は声たかく、

〜狩人の尋ぬる鹿はいなみ野に

と古歌を吟ずる上よりも、

〜あはでのみこそ有まほしけれ

と、思はず下を続けしが、たがひに看会す上と下。小蝶ははつと一契驚つ、ありあふ顙の釵をはつしと打たる早速の手裏剣。こなたも透さず携へし鹿笛をもて受とめぬ。

再話、桂木照人清澄は名笛ふたたび手に入しかば、父母にしばしの暇をつげ、夜を昼につぎて山口に立かへり、義忠の御前にいでて在しことども落もなく微細に啓上、名管（挿絵5－②）をさしあげ、屢、身の誤りを賠話たてまつるに、小蝶が縁をひくといへども、素より照人、邪智なきことは義忠よく知し召れたれば、憐愍をもて罪をゆるされける。

さてまた義忠は、過にし頃、武将の重宝廟の香炉紛失により、室町殿のうたがひかかり、国家の大事にをよびしを、伯父典礼弘茂、善心に翻り切腹をとげ、曲者詮義の其あいだ猶予の日延を願ひしにより、些し心を安んぜども、曲者を搦めとらずしては言ひらき明白ならざれば、八方に家臣をわかち、草をわかつて詮義あれども、曾てゆくへしれざりしに、氷室内蔵之助景行、入相権平と籌策をさだめ、室の津の廓にして熊坂小蝶を見あらはし、慥にそれと察せしゆへ、柳巷の四面をとりかこみ、籠中の鳥にひとしくして、搦捕んとなしたるに、不測に降くる花の吹雪に其往去を見うしなひ、猶も有処をもとめんと詮義に時日を送られけるが、夏往、秋の下旬にいたり、一日、執権氷室内蔵之助景行、羇より帰り来つて、主君に暗に啓や

（挿絵5－②）

う、
「吾、先頃より諸国を歴廻、士農工商はいふにをよばず、樵夫、山児、猟夫となり、曲者の往去を索ぬるに、過つる夜、榛間の国、峰相山の境内にて一時間まどろむ其中に、如此の事はべりし故、若党入相権平をもて此辺にしのばせ、暗に是をまもらせ置り。こは四面より取囲まば最やすきに似たれども、若、香炉にあやまちあらば毛を吹て疵をもとむるに斉し。故に、『可様可様の籌策をもつて、宝を難なく奪ひかへさんには不如』と思慮を惟らしはべるまま、即地に帰国つかまつれり」
と啓に、義忠、あまたたび勧喜（歓喜）、
「今にはじめぬ你が計略。感ずるにあまりあり。此上は猶予すべきにあらず」
と、既に准備をなしたまひ、「近きに京師にのぼるべき」と言触させける。
是によつて照人清澄は、小蝶が事も心にかかり、両親にも其のちは絶て便もあらざれば、今般の倶を願ひつつ、主君にしたがひ軈て発足をなしぬ。
爾程に熊阪小蝶は過し夜、はからず孽を告るてふ麝の香炉、音を発し、慥に誰とは見究ねど、猟夫の貌に出扮し庸人ならぬ一個の癖者、有処をさとせし風色なれば、心よからず思ふがゆへ、八方に伏たる属下の男女に心をくばらせ、「若、責よすることもあらば、如此如此に計へよ」と軍慮をこたることぞなき。
爾るに一日、一個の属下、いそがはしく帰り来て、注進していはく、
「予て魁首の命にて、風吹音にも心をくばり、凶事やあらんと候ふ所に、かへつて僥倖いできたれり。そはいかなることなれば、大内義忠、先だつて麝の香炉、手に入まで猶予の日延を願ひしが、其后、数の月日をすぐれど、今に有処のしれざれば、有無の訴なすこと能はず。これによつて室町殿の存意よからず、大内之助義忠に『直々火急て上洛せよ』と、以外の御憤りにつき、厳なる命下るによて、取ものも携あへず、家臣わづかめしつれて京師をさして登るよし、聴

とひとしく街にしのび、其径条をうかがふに、既に今夜、斑鳩の駅につき、本陣に泊りしを治定と見とどけ立かへれり。今夜、彼旅宿にをしよせ、不意を撃ば勝利を得んこと眼前なり」

と、勇み立て告るにぞ、小蝶は聴より雀踊し、

「こは屈竟のことを聴出せり。たとへ家隷許多なりとも、羇路の不意に夜討せば、勝利、心にまかすべし。其上、従者も多からざる風色といへば、日頃の意霧を晴すべき時いたれり。先、をしよすべき准備せん」

と、許多の属下に相図の狼煙あぐるとひとしく、八方に蟄したる属下の男女、乾池の魚の雨を得しごとく踊りはね、いさみ進んで、吾も吾もと峰相山の絶頂に走あつまり、ここにて勢を揃へつつ、各々備へを定めけり。其勢、男女合せて七十五個とぞ。真中には熊坂小蝶、南蛮鉄の鎖帷子に忍びの装束勇しく着し、右の手には金の采配を携へ、左の手には薙刀かいこみ、夜撃の着令をなしつ、菊稚君には属下の婦、両三個を属て深しのばせ、既に初更の時分より斑鳩の駅にぞ趣きぬ。

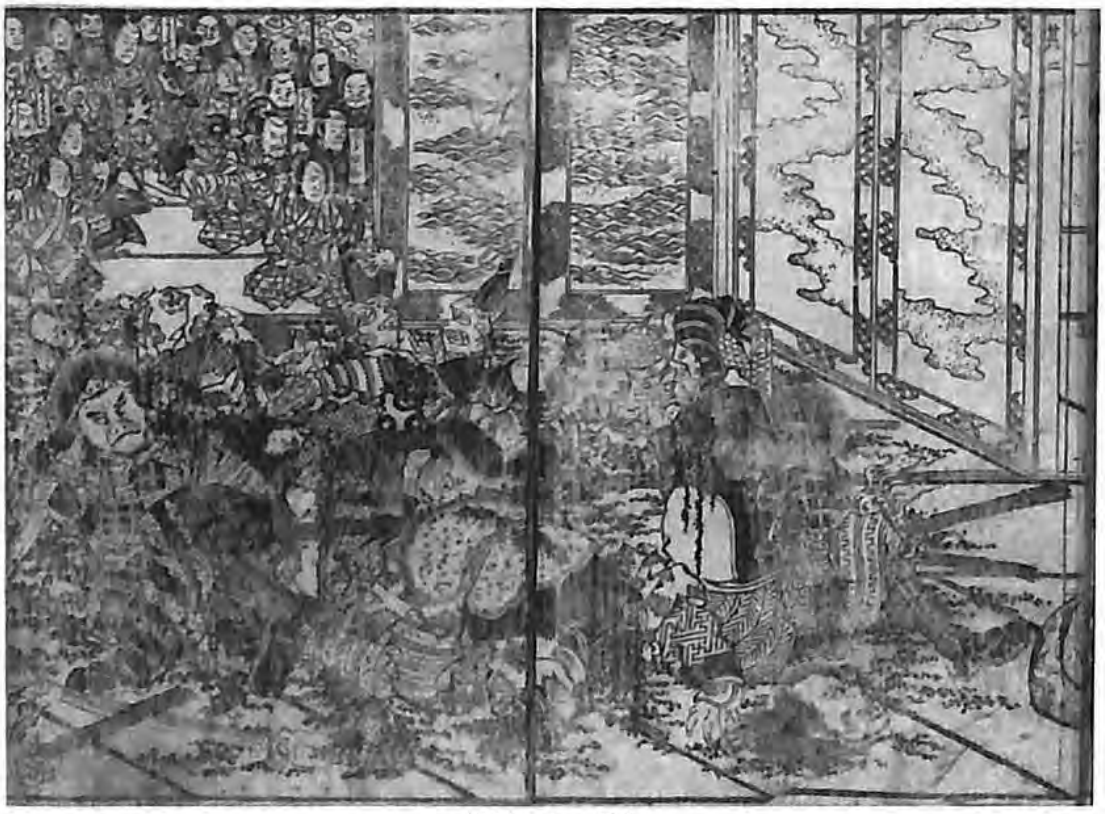
第十套　屍並旅館戦　情治兵家栄

斯て夜撃の兵ども、思ひ思ひの好みの装束、臂鎧臑楯に体をかため、蟄び頭巾に眼ばかり出し、銘々得具を引さげつつ斑鳩の駅にいたるに、四面に人音しづまりて、夜もしんしんと更闌り、水も寝てふ丑満時（丑三時）、義忠が泊りたまふ本陣の表にをしよする。真先かけて海堂五郎、をもて討には双びなき手練のわけ斫、暗撃、追斫。早走に名を得たる河津飛六。車拒火（炬火）ともしの上手、名にきこへたる夏山壮男。しのびがへし、藪畳、高磯、大門、手練の早とび、早業にかくれなき雲雀の空若、焼野の喜治郎。婦武者には由縁の藤浪、飼屋阿桑、井出の八重花。其余、一人当千の剛者ども。後ぞなへは熊坂小蝶、前後左右に眼を配り、旅館の表をひたひたと追取まはし立たる分野、鳥も洩さぬ威勢なり。

小蝶は着令して、

「恁に徒党。たがひに相図の隠語を合せ、必らずとも
に同士討すな。目ざすは大将大内義忠。逃る党に手を
負せそ。時こそよけれ。疾いれ」
と言こそ程も久しけれ、渾、我さきにと戸を打くだ
き、明松投こみ乱れいる。内には予て期したるか、間
毎に許多の灯火をてらし、恰も白昼のごとくにて、数
百の軍兵あらはれいで、斫入対軍にわたり合、ここを
専途と戦ひつつ、斫つきられつ突つかれ、丁と討、加
瀝利と合する太刀先は電光石火を吐いだし、物凄
き事ども なり。されば小蝶が閲の党、猛虎飛竜の勢
ひにて、些しも疼ず撃合ども、館の軍兵、しだいに
充満、潮の涌がごとくにて、荒手（新手）を加へてた
たかはしむるに、有繋に猛き豪傑等も全体鉄石にあら
ざれば、戦ひつかれて太刀先みだれ、陣没なす兵半に
過、旅館の広庭、床の上、屍一場に枕をならべ、恰
も碁石を蒔ちらすに異ならず。是に億（臆）せし党
は後を見せて逃失るもありて、今は後詰にひかへたる
小蝶一個、このありさまに大きに一契驚、
「かれらは所謂強気の逞兵。この者ども を斯までに討
はいかなる手段あるや。なににまれ、斫入て属下の怨
敵を撃んず」
と、奥の間を望でいらんとせしが、（挿絵5－③）
（挿絵5－④）
『峰相山にしのばせし菊稚君の御身のうへ、恁あら
ん』
と供億つ、
『もし斫入て撃死なさば、かへつて主君へ不忠となれ
ば、一まづここを引とりて、主君の安危を問たてまつ
らん』
と、影護も薙刀かいこみ、此場をさらんと做をりし
も、後辺より声たかく、
「やをれ、菊地の残党、熊坂小蝶。大内之助義忠、こ
れにあり。見参せん」
と喚はつて、一間を颯とをしあくれば、真中には大内
之助義忠、兵具爽によろひ、床几にかかり、傍辺に
は菊稚丸、つづいて執権内蔵之助、桂木照人、入相権

（挿絵５－③）



（挿絵５－④）

平、其余あまたの家臣等、威儀を正して並居たり。さしもの小蝶も仰天し、菊稚君を見るにつけ、『恁なる故ぞ』と夢見しここち、更に不審ははれざりし。此時、氷室内蔵之助、小蝶にむかひ、声たかく、

「不審めるは所理なり。過つる頃、宝詮義のため、戯男となつて室の津の柳巷にあそび、是なる入相権平と籌策をしめし合せ、既に你を見あらはし、搦捕んとなしつるに、桜の精の奇瑞によつて其往去を見うしなひ、猶も僉議に怠たらざりしに、不図もさんぬる夜、鶏足寺の大塔にて、四面に屡鳴鹿の音に眠をさます壇の上。をりから嶺よりさし出る月影。

小てう 「○さては其時、猟夫の貌に出扮、『猟夫の索ぬる鹿は印南野に』と古歌の上をば吟ぜしは」

景 「○此景行にてありつるぞ。『あわでのみこそ有まほしけれ』と思わず下を続けし時、栖家を治定と伺ひをき、今宵、僅の家隷を倶し、ここに泊ると言触させ、手段をかまへて偽引よせ、後へまはつて菊稚丸、麝の香炉もろとも奪ひとつて立かへれり」

と聴に、小蝶は無念の歯齦、

「よくも武運に竭たる此身。『十が九、仕負せし』と思ひし事は幾回か。計略たちまち齟齬、怨を散ずることあたはず。あな、口惜や、残念」

と、どつかと坐して泣沈む。菊稚、身辺にかけよつて、

「をんみ、此に夜撃せんと出にしあとにはわづかの婦、吾に傳きいたりしが、不意によせくる討手の軍勢、鬩の党等、討とられ、自殺をとげんとせし所に、是なる照人かけよつて、屡降参を勧むるに、固辞はかへつて武士の厚情を疎になすに似たれば、照人の言にまかせ、今日ただいま降参せり」

と聴て小蝶は「はつ」とばかり、勇気もたゆむ形勢に、義忠、小蝶に対ひつつ、

「你、吾に怨をふくみ、武将の重器を奪ひとり、数回諸国をさはがす其罪、かろきにあらねども、是渾、滅びし家国を再興なさんと鉄石に忠義を比したる志ざし。弓箭とる身は斯ありなん。又、桂木照人、身

をなげうち、菊稚に降参なさしめ、你が助命を屢々願ふは、これ、同胞の義を廃ざるところ。彼を思ひ此を感じ、既に武将の重宝たる名香炉、手に入上は吾言ひらきも明白なれば、今日より菊稚に力をそへ、室町殿に訴へ、你主従が罪の赦免をねがひ、菊地の家の再興をよきに推挙し得させんと思へり。させる上は日頃の宿意も達する道理なれば、四海の無事をととなへよ」と、仁心ふかき義忠が詞に、小蝶は両手をつかへ頸をさげて平伏し、

「かかる仁義の名将に刃むかふ刃のあるべきか。主君の国家再興せば余の所望の何かあるべき。露をしからぬ吾命。叛逆徒党の張本たる熊坂に縄かけられ、速に罪せられよ」

と、われと後に手を廻せば、義忠、感じて言ふやう、

「いやとよ。小蝶。忠臣は義に死す。明君は人の善を掩ずとて、趙子、再び予譲を助けし例もあり。你が助命は某が胸中にあり」

と厚き情の言の葉に、小蝶は「はつ」と感涙にむせんで言も出ざりき。

斯て爾後、義忠は香炉を携へ京師に登り、武将義持卿にささげ、此一条の端終を微細に啓上、野心なき言ひらきを明白になしたまふに、武将の疑念、ただちに晴たり。しかるに義忠、謹んで、尚、菊地家の再興、且には小蝶が助命を願はれければ、義持卿にも只管感激したまひ、時をこへずして菊地家本領安堵の御教書を下され、小蝶が罪をゆるされける。是なん、武将、且には義忠が仁心ふかきによる所なり。

かかりし程に菊稚はただちに菊地左馬之助忠重と名を更め、上洛して室町に参り、国家再興の厚恩を謝し、軈て本国に立かゑり、八代に城を築き、則、小蝶を執権として国家相続なし玉ふ。

茲にまた、蝶六夫婦は、「忠義にうせし桜木の菩提を弔らはん」と、髪をおろし出家となれるに、桂木照人は桜子のみつぎたる身価金を其ままに手を下さず有しをもて、許多の樵夫、山児を傭ひ、枯し桜を悉伐しめ、幹真中をもつて観世音の尊像を刻ませ、余れる

材をもつて一宇の堂舎を営なまんと、肥藩に往て姉小蝶にかくと告、商儀なすに、小蝶も大に感激し、主君忠重にも啓上けるに、許多の黄金を寄付し玉ひ、其上、八代の山中をきりひらかし、堂舎の地面に給りけるぞ有難き。年を経ずして成就したりければ、大内家よりも夥の金銀米銭を寄付し玉ひぬ。されば、大樹の桜木なれば、堂舎をいとなむ用材、ちとも余木をもちゆるに及ばず、此桜木のみをもて全く成就したれば、桜樹寺と号け、俗に桜の寺とよび、又、桜木の観音と称ずとなん。蝶六夫婦は僥倖によき守護人なりとて、ただちに此寺に来り、日終勤経をこたらず、仏につかへ、桜木の菩提を懇に弔らひぬ。

去程に、桂木照人も年いまだ若しといへども、妻をむかふる心もなく、桜木が誠心のあつきを不便にをもひ続け居たりしが、稍て楽道に秀でし門弟を見立、養子となし、家名を相続なさしめ、其身は仕官を辞して剃髪し、墨の衣に貌をかへ、是も此桜の寺に入て、親子三人もろともに桜が菩提を厚弔ひぬ。

そののち、大内、鞠地の両家よりして、討死なした許多の武官等の菩提にとて、此桜樹寺にして名僧知職（知識）をむかへ大法事を執行はれける。

されば、両家は日々に繁栄し、武将義持朝臣より御息女二子を義忠、忠重に下されければ、益々威徳さかんにして、竜の翼（虎の翼）を得たるにひとしく、後、両将とも二男一女をもふけ、互ひに女子をとりかはし嫡男に嫁あはせ、最むつまじくなしたまひける。

且、放鹿が丘の弘茂が館も、典礼自殺の後、夫人にも身まかりたまひ、家しばし相続すべきものなく、退転したりしを、次男の若君をもて家名を発し、先祖の菩提をとぶらはし玉ひ、仁義五常の道ただしく、民をあはれみたまふ事、仮初ならざれば、采地一片に傾ずといふことなく、秋の草の風に偃がごとく君恩をよろこび、御代泰平に治まり、国家さかへけるぞ、恭喜々々。

女熊坂朧夜草紙　巻之五　大尾

（跋文）

跋（印「一興」）

鐘成子者、姓木村、名明啓、字淇唱亭。於鴛鴦号舎於鶏鳴。暁鐘成者、其諧称也。性嗜酒、好遊不屑。於世俗滑稽戯劇、能解人之頤、一端有故而廃於俗業、再不顧、於世事以戯作自隠而稗史一成、画図自親焉。今、浪花都城、稗史小説之行也。特出鐘成子。

政未夏日、撰併書於蕉雨斎中

沢春耕　消暑漫戯

（陰刻印「□□（不読）」「之誠」）（印「墨戯」）

（刊記）

華府　暁鐘成　著併画
大阪　和田正兵衛　書
京師　井上治兵衛　刀
文政八年乙酉春正月発兌
京　本屋宗七
江戸　鶴屋喜右衛門
書坊　尾張　松屋善兵衛
大阪　河内屋太助
同　河内屋平七

（参考・初印本系刊記）

華府　暁鐘成　著併画
大阪　和田正兵衛　書
京師　井上治兵衛　刀
文政七年甲申春王月発兌
京　本屋宗七
同　丸屋善兵衛
書坊　尾張　松屋善兵衛
江戸　大阪屋茂吉
大阪　河内屋平七

翻刻『女熊阪朧夜草紙』

二〇二〇年三月三〇日　印刷
二〇二〇年三月三〇日　発行
（二〇一九年度　尾道市立大学
教員個人研究費による）

尾道市立大学　芸術文化学部　日本文学科
近世文学原典講読ゼミ　翻刻
指導教員　藤沢　毅　校訂編集
〒七二二―八五〇六
尾道市久山田町一六〇〇―二
TEL　〇八四八―二二―八三一一(代)

印刷・製本　P・Zコーポレーション株式会社
〒七二二―〇〇七三
尾道市向島町一一六五一
TEL　〇八四八―三六―五三七九(代)

（非売品）